第2章 千曲市の維持向上すべき歴史的風致

本市における維持向上を目指すべき歴史的風致とするべきものには、千曲川左岸のからには、千曲川左岸の世界では、1000円では

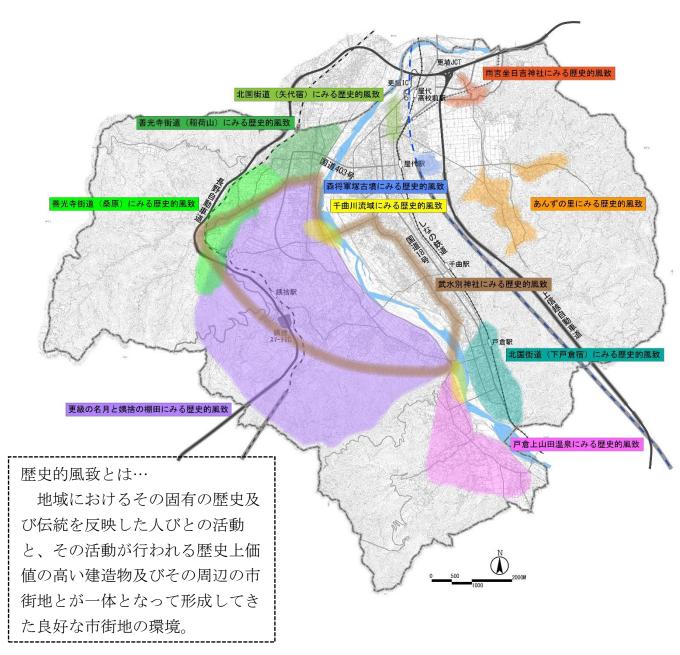


図 2-1 千曲市歴史的風致位置図

千曲市の歴史的風致

千曲川左岸 川西地域

- 1. 善光寺街道にみる歴史的 風致
- 2. 武水別神社にみる歴史 的風致
- 3. 更級の名月と姨捨の棚 田にみる歴史的風致
- 4. 戸倉上山田温泉にみる 歴史的風致

千曲 川

9. 千曲川流域にみる 歴史的風致

千曲川右岸 川東地域

- 5. 北国街道にみる歴史的風致
- 6. 雨宮坐日吉神社にみる歴史 的風致
- 7. あんずの里にみる歴史的風 致
- 8. 森将軍塚古墳にみる歴史的 風致

図 2-2 千曲市の歴史的風致の構成

表 2-1 千曲市の歴史的風致及び構成文化財

No.	名称	歴史的風致	主な指定等文化財
1	善光寺街道にみる	(1)伝統的建造物群と祇園祭など	· 千曲市稲荷山 重要伝統的建造物群保存地区
	歴史的風致		・市指定無形民俗文化財 稲荷山の祇園祭
		(2)酒造所と酒造り・中原の神楽	・登録有形文化財 長野銘醸酒蔵ほか
			・無形民俗文化財 中原の獅子舞神楽
2	武水別神社にみる	武水別神社・松田家と大頭祭	・県宝 高良社本殿
	歴史的風致		市指定有形文化財 松田家住宅
			• 県史跡松田家館跡
			・記録選択 武水別神社の頭人行事
3	更級の名月と姨捨	冠着山・長楽寺と観月	・名勝 姨捨(田毎の月)
	の棚田にみる歴史	棚田と棚田耕作・百八灯	・重要文化的景観 姨捨の棚田
	的風致		・市指定無形民俗文化財 大池の百八灯
4	戸倉上山田温泉に	和風旅館・温泉街と夏祭	・登録有形文化財 笹屋ホテル別荘
	みる歴史的風致	智識寺と神楽	・重要文化財智識寺大御堂・十一面観音立像
5	北国街道にみる歴	(1)水上布奈山神社と御柱祭	重要文化財 水上布奈山神社本殿
	史的風致		市指定無形民俗文化財 同 神社の御柱祭
		(2)須須岐水神社と一つ物	
6	雨宮坐日吉神社に	雨宮坐日吉神社と御神事	・重要無形民俗文化財 雨宮の神事芸能
	みる歴史的風致		
7	あんずの里にみる	歴史的建造物とあんず栽培・花見	
	歴史的風致		
8	森将軍塚古墳にみ	森将軍塚古墳と保存	· 史跡埴科古墳群 森将軍塚古墳
	る歴史的風致		
9	千曲川流域にみる	千曲川の堤防と伝統行事など	・記録選択 武水別神社の頭人行事
	歴史的風致		・重要無形民俗文化財 雨宮の神事芸能

1 善光寺街道にみる歴史的風致

善光寺街道は、江戸時代に整備された街道で、「北国西往還」とも呼ばれている。中山道 * 大馬 から松本・麻績を経て猿ヶ馬場 峠 を越え、桑原・稲荷山宿を通り篠ノ井追分 宿で北国街道に合流する街道である。街道沿いには、稲荷山宿・桑原宿が置かれ、宿 場町を中心に町並みが形成された。

現在、善光寺街道の一部は国道 403 号線となり、幹線道路沿いにかつての宿場の面影を残した特色のある市街地が形成されている。

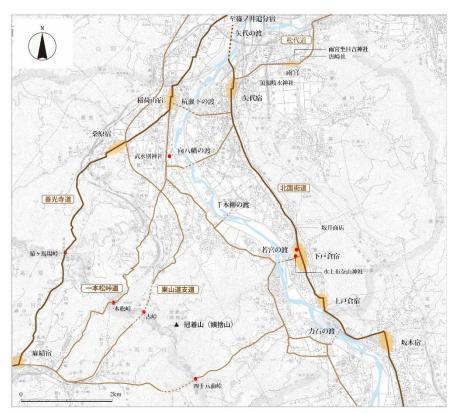


図 2-3 千曲市内の街道及び稲荷山、桑原・中原地区位置

(1) 稲荷山地区

稲荷山の歴史

稲荷山地区は天正 12 年 (1584)、上杉景勝がここに稲荷山城を築いた時に町並みが 形成されたことに始まる。慶長 7 年 (1602) に中山道の伝馬制度が定められ、稲荷山 は善光寺街道の宿場となった。この街道は、松本平と善光寺平を結ぶ物資輸送上の役 割が大きく、稲荷山宿の天保 13 年 (1842) の諸商売の記録をみると、111 軒のうち旅

籠屋は6軒、茶屋が10軒、多いのは太物(綿花・綿織物)を商う店が34軒、太物と他の品を扱う店が10軒ほどあり、太物を扱う商業地として栄えていた様子がわかる。

稲荷山宿は、宝暦 11 年 (1761) に火災に遭いその後、防火のために道幅を 5 間 (約 9 m) に拡幅したといい、現在も表通りの道幅は広い。弘化 4 年



写真 道幅の広い表通り

(1847)の善光寺地震では、稲荷山宿の被害は甚大で、地震後の火災で町並みは焼失してしまった。この地震では、善光寺の御開帳の最中であったことから、住民のほかに善光寺参りの旅人が多数犠牲となった。

明治以後、善光寺街道は「北国西街道」と呼ばれる二等道路となった。明治 13 年 (1880) の記録によれば、稲荷山町の家数は 463 戸で、うち 300 戸が商業を主として営んでいた。また、163 戸が農桑を営み農閑期には商業をしていた。商業が盛んであったことから、明治 14 年 (1881) には稲荷山銀行 (のちに第六十三銀行となる) が創業され、金融業も盛んであった。稲荷山は商業地として発展し、明治 23 年度(1890) の県町村課税格付けによると、長野町の一等、松本町の二等に次いで、稲荷山町は三等と、県内で主要商業地の地位を占めていた。明治以降は、江戸時代の綿業が衰退し、繭や生糸の取り次ぎが主となる商業地として賑わった。

明治21年(1888)に直江津・軽井沢間の鉄道が開通し、同26年(1893)には信越線が東京まで全通した。また篠ノ井線も同35年(1902)に篠ノ井・塩尻間が全通した。北信の物資集散地として繁栄を誇っていた稲荷山だったが、物資の大半が屋代や篠ノ井両駅に運ばれるようになり、駅のない稲荷山の商業地としての地位はしだいに低下するようになった。

大正 11 年 (1922) には、現八十二銀行の前身である第六十三銀行の本店が長野市 に移転し、その後昭和 4 年 (1929) には世界恐慌が起きて繭・生糸価格が暴落し、空 前の不況が稲荷山を襲った。

こうした歴史を経た稲荷山地区には、現在、かつての賑わいをほうふつさせる大きな商家や蔵が当時のまま残り、江戸時代末期から明治・大正・昭和の町家や土蔵、茅葺屋根の養蚕民家など多様な建物群(約200棟)が伝統的建

造物群を構成している。

稲荷山の伝統的建造物群

平成 26 年 (2014) に、重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた東西約 200m、南北約 850m、面積約 13.0ha の "千曲市稲荷山伝統的建造物群保存地区"では、敷地は街路に対して短冊型に割られ、町場と城跡を囲むように水路が配され、その水路は現在も街路や敷地割とともに良く残っている。

個々の敷地では、街道に面して間口いっぱいに主屋を建て、 細長い敷地の奥には土蔵や離れや物置などの附属屋を置き、 敷地背後の裏通りに沿って土蔵を並べ、裏門を構えている。

主屋は、切妻造平入を基本とする二階建ての瓦葺きである。 弘化4年(1847)の地震後、瓦葺で大壁造の町家が建てられるようになったが、全ての建物が一斉に耐火構造になったわけではなく、茅葺の建物も建てられており、これら茅葺の町家も現存している。明治中頃には、二階を大壁とし、短い軒を厚く蛇腹状に塗り込めた家屋が現れ、中には大棟に影盛を

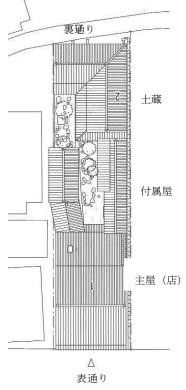


図 2-4 代表的な町家

施すものもみられる。屋根勾配が8寸程度と急勾配であることが特徴的で、急勾配の 茅葺屋根の影響とみられている。

間取は、通り土間に居室を並べ、通り土間が比較的幅が狭いものが多くみられる。 居間にあたる土間に面した部屋は、吹抜けとしている。戸口は大戸とし、店舗や居室 前面の庇部分は土間としており、入側筋で仕切るものが多く、古いものでは摺上戸、 近代以降では雨戸仕舞としている。

稲荷山では、19世紀初期以降、建物の街道側の壁を取り払って商家に転じたと伝えられており、多様な形態の主屋の存在は、稲荷山の主屋が一般的な町家の発展的な形式ではないことを示している。

敷地奥に建てられた土蔵は、壁を中塗仕上げとするもの、白漆喰仕上げとするもの、 さらに腰壁を海鼠壁とするものや、板張とするものなどがある。



図 2-5 稲荷山伝統的建造物群保存地区範囲

稲荷山自衛団

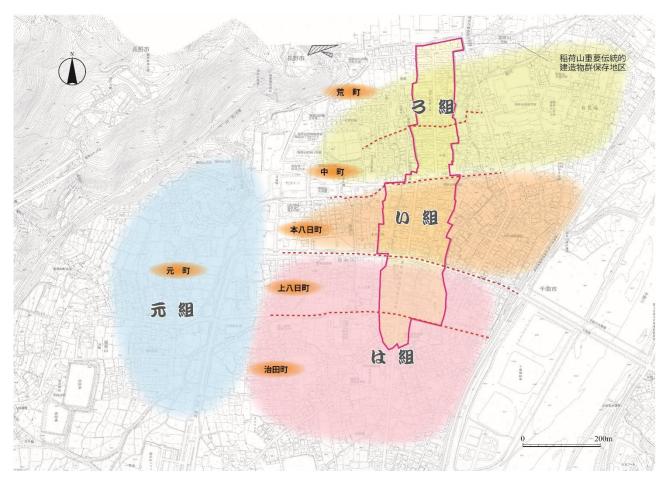
こうした町家や蔵が密集した建造物の防火については、現在各町の自治会長の下に置かれた市内で唯一の総勢 120 名ほどの自衛消防組織「稲荷山自衛団い組(本八日町)・ろ組(中町・荒町)・は組(治田町・上八日町)・元組(元町)分団」によって支えられている。自衛団は、各町の消防器具の点検や防火パトロール、初期消火活動を市消防団と協力して行っている。こうした自衛団の



写真 稲荷山消防組腕用ポンプ (1908 年製)

活動をとおして、稲荷山の伝統的建造物群の町並みは守られている。また防火パトロールの拍子木の音が、日々伝統的建造物群を含む町並みに響きわたり、地区住民の生活リズムをも作り出している。

稲荷山自衛団は明治 16 年 (1883) に、商業が盛んになり大小の町家が立ち並んだことによりその防火が懸念されたことから、自衛消防組織の「い組」消防組が組織され、その後「稲荷山消防組」となり、現在に引き継がれている。



*色範囲は、各町に置かれた消防組の活動範囲

図 2-6 稲荷山自衛団活動範囲

稲荷山の祇園祭

自衛消防組織を作り自ら守ってきた伝統的建造物群とともに、伝統行事の「祇園祭」も古くから引き継がれている。稲荷山の祇園祭は、町家や白壁の蔵の町並みに祇園祭の神輿の「ワッショイ、ワッショイ」との掛け声が響き、「勇獅子が練り歩き、山車のお囃子や踊りなどが賑わいをみせる。明治時代稲荷山が「北信濃の商都」として繁栄した様子を伝える伝統的建造物群の町並みを舞台として行われる、江戸時代から続く夏の訪れを告げる風物詩となっている。

稲荷山の祗園祭の歴史は、江戸時代稲荷山宿では商業が盛んで賑わっていたことから、享保 18年 (1733) に京都の八坂神社から牛頭天王を勧請し、町内に疫神宮牛頭天王社を設けて祗園祭を行うようになったのが始まりである。祭りは天明 5年 (1785) に神輿を建造して盛んになったが、弘化 4年 (1847) の善光寺地震で町並みとともに焼失してしまった。

地震後、商業が盛んになった幕末ごろから祇園祭の再開が願われ、商店主を中心に住民の寄附により、慶応元年(1865)に神輿はじめ、四方を守る神の四神像、雨乞豊作を祈願する水神の剣龍像も合せて新調し、祇園祭が再び始まった。

本社詣が遠方であることなどから、いつのころからか詳細は不明であるが、八坂神社同様に牛頭天王を祀っている愛知県津島神社に詣でるようになり、明治41年(1908)に津島神社の牛頭天王を勧請して治田神社境内に津島社を設け、祇園の神として祀った。古くは「疫病退散」と「無病息災」を願ったもので商人中心の祭りではなかったが、明治になり稲荷山の商売が盛んになったころから、「商売繁盛」を願い、祇園祭が盛大に行われるようになり現在へと続いている。

現在、祭りは治田町・上八日町・本八日町・中町・ をきます 荒町の順に、祭りの準備や神輿の仮屋の設置や世話を 当番町が担当し、7月中旬の3日間、盛大に祭りが行われている。

祇園祭は7月朔日、町境に災厄の侵入を阻むために 青竹を立て、注連縄を張ることから始まる。当番町内 に神輿の仮屋、通りに面して四神像と剣龍像を安置し て祭りの準備を整える。



写真 神輿の巡行



写真 勇壮な勇獅子の巡行

第一日目は、早朝から神輿巡行の道筋を清掃し、「天王下し」の神事が行われ、神輿を当番町内に設けた仮屋に遷座し、夕刻「神輿お魂入れ」の神事が行われる。

第二日目は「宵祭り」で、夕刻から神輿の町内巡行、勇獅子の演舞が行われる。

第三日目は「本祭り」となり、神輿巡行に続き、勇獅子巡行が行われ、神輿を治田神社の津島社まで担ぎ「天王上げ」神事が行われ、祭りは終了する。

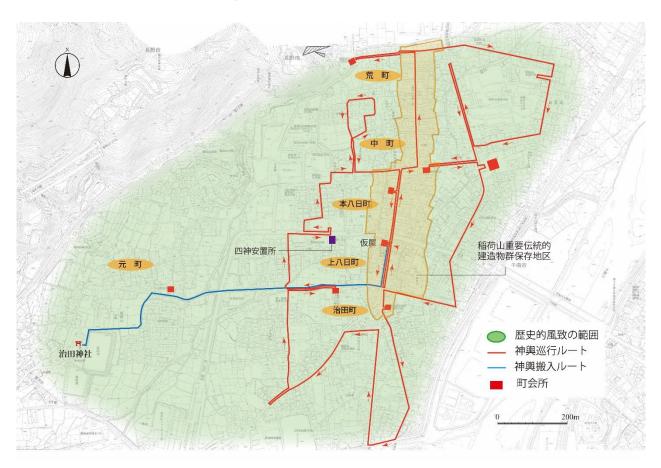
この稲荷山の祇園祭は、現在5町の人びとによって支えられている。そうした中で、

町内有志により大正5年(1916)の治田神社拝殿新築祝賀会に始まった勇獅子は、稲荷山勇獅子保存会を設け現在80人(振子60人・お囃子20人)の会員により、勇獅子に曳かれる山車で太鼓・笛・鉦・三味線に合わせ舞を披露し、祇園祭に華を添えている。また、高齢化や人口減などによる神輿の担ぎ手不足の中で、平成16年(2004)に住民有志によって稲荷山神輿会が結成され、現在高校生から年配者まで90人(内女性20人)のメンバーで伝統の神輿巡行を支えている。

祇園祭は、稲荷山地区全体で行っている祭りである。図に示した経路は、平成27年度の当番町上八日町での神輿巡行経路であるが、ほかの町でもほぼ同様な経路で稲荷山地区内を巡行している。治田神社から担ぎ出された神輿は、南端の治田町から北端の荒町まで表通りだけでなく、裏通りまで5町内全域を巡行して、地区の人びとに禍がおこらないよう願い、また地区の結束を深めるものでもある。

まとめ

善光寺街道にみる歴史的風致の一つは、江戸時代から続く稲荷山伝統的建造物群と、そこに暮らしてきた人びとが自ら町を守る自衛団の活動および、その伝統的な町並みを舞台とする伝統行事の祇園祭である。歴史ある町並みとともに、自衛団の活動や伝統的な祇園祭は、稲荷山地区全体で執り行っているもので、今後も引き継いでいきたい貴重な歴史的風致である。



*平成27年度上八日町当番町において

図 2-7 祇園祭神輿巡行経路及び稲荷山地区の歴史的風致範囲

(2) 桑原·中原地区

桑原宿の歴史と概要

善光寺街道を稲荷山宿からなりにある集落が景が時代では への登り口にある集落が桑原宿で、 峠を越えた麻績宿と稲荷山宿の間 の宿として寛永元年(1624)に伝 馬屋敷が設置された宿である。元禄 7年(1694)には、屋敷数 77 軒の うち、46 軒で伝馬役を務めていた。 松代藩では、桑原宿を他領への出入 り口として重要視しており、また松 代藩の家臣の継立があった。幕末の 元治元年(1864)には、松代藩士



図 2-8 善光寺街道と桑原宿・中原

佐久間象山が京都へ行く途中、まず桑原宿の関家で一泊 してから上京している。

関家には、主屋はじめ長屋門・巡検使門が当時のまま残っている。ほかにも、通りに面して格子戸やうだつを 設けた建物が江戸時代の宿場をしのばせている。

桑原宿に接した、猿ヶ馬場峠登り口の集落が中原地区である。中原地区には、通りに面して造り酒屋の和田酒店の長屋門、それに続く漆喰塗りの土塀が続き、塀の中には酒蔵や貯蔵所、文庫蔵などの建物群や、『善光寺道名所図会』[天保14年(1843)出版]に描かれている見事な枝ぶりの赤松も望める。

西部山地の山麓である八幡の郡から中原地区には、「八幡の七清水(七頭)」と呼ばれる湧水群があり、豊富な湧水が湧き出している。この湧水は、三峰山の山腹に湧き出したもので、中原の頭無・郡の頭無・山の神・
「たきざわいで、本語では、一部の頭無・山の神・
「たきざわいだった。」と呼ばれる湧水群があり、豊富な湧水が湧き出したいる。この湧水は、三峰山の山腹に湧き出したもので、中原の頭無・郡の頭無・山の神・
「たきざわいた。」といいた。「本れき」をおいけている。

大池の弁財天の湧水は、姨捨の棚田一帯の農業用水として江戸時代から使われている。また、嘉暦・郡の頭無・山の神の湧水は、現在市営水道の水源に利用されている。

こうした湧水群は、西部山地の豊かな自然環境によっ



写真 関家の巡検使門・長屋門



写真 格子戸を設けた建物



写真 うだつを設けた建物

て涸れることなく、現在も千曲川左岸の山腹斜面での水田耕作や生活用水、酒造りなどに使用されている。

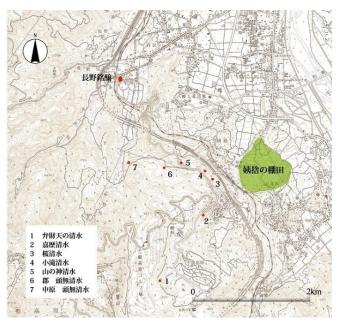


図 2-9 八幡の七清水(七頭)

酒造り

豊富な湧水に加えて良質な水であること、山麓斜面の棚田での米の生産が増加したことなどから、元禄2年(1689)に造り酒屋「和田酒店」が創業しており、現在も酒造りが行われている。市内では、唯一の造り酒屋㈱長野銘醸である。

大正5年(1916)建築の事務所棟はじめ12棟の登録有 形文化財の建物があり、現在その建物で酒造りが行われ ている。酒蔵は江戸末期の建築で、梁間6間、桁行24間 ほどの木造二階建ての土蔵造りの建物であり、洗い場・ 上槽場・仕込蔵に分けられている。米蔵から運び込まれ た白米が洗い場で洗米され、隣接の釜場で蒸された蒸米 は二階の麹室で3日間、酒母室で21日間ねかされた後、 一階の仕込蔵で仕込みが行われる。このほかに江戸末期 の建物には、貯蔵蔵・米蔵・粕蔵・西納屋・東土蔵・西 土蔵及び、善光寺街道に面して建つ長屋門がある。その 後建てられた建物には、明治前期の文庫蔵、明治40年 (1907)の東納屋、大正10年(1921)の南蔵がある。



写真 街道沿いの造り酒屋



写真 街道に面した長屋門



写真 大正時代の事務所



写真 江戸時代末期の酒蔵

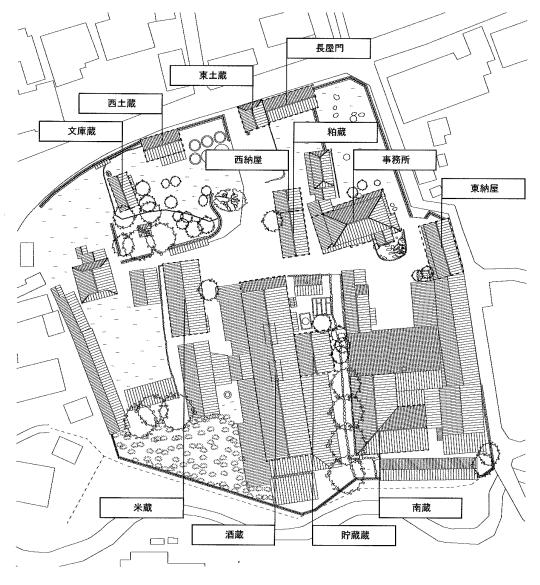


図 2-10 長野銘醸(和田酒店)建物配置

中原の獅子舞神楽

中原には酒造りのほかに、江戸時代から続く民俗芸能の獅子舞神楽があり、現在「中原神楽保存会」により獅子舞神楽が伝承されている。地元の中原神社へ続く街道には、うだつや格子戸のある建物が今も残り、中原神社で行われる祭りでは、そのような歴史を感じさせる町並みの中、神楽の笛や太鼓の音色が響きわたり、より一層町並みに趣きを与えながら、神社本殿前では獅子舞神楽が奉納されている。



写真 中原の獅子舞神楽

中原の獅子舞神楽の起こりは、和田酒店の当主が

宝暦元年(1751)頃に、神楽芸人を和田家に泊めて地元中原の人たちに芸を習わせたとか、和田酒店の当主が天保年間に、中原に投宿した甲州の神楽師宮下惣蔵兄弟から

地元の若者に甲州菱流雌獅子舞を学ばせたなどと 伝えられている。

いずれにせよ、宝暦年間 (1751-1763) に神楽が 北信地域の各地に伝えられ、そこへ天保年間 (1830-1843) に甲州流の舞が付け加えられて、現在に至っていると推測される。安永8年 (1779) に武水別神社の大頭祭に「中原組太神楽」奉納の記録が残ることから、その頃から行われていたと考えられている。



写真 中原の獅子舞神楽

中原の獅子舞神楽は、「太々神楽」と呼ばれる二人一組で演じる雌獅子舞で、一人が獅子頭を操り、一人が獅子頭の後について布さばきを補い、太鼓・笛・鉦の音に合わせて獅子舞が演じられるものである。江戸時代の中頃から、地元の祭りや武水別神

社の大頭祭などの祭礼に演じられてきた。また、獅子頭の持ち運びには、リヤカーに小型の神殿造りの神輿の下に獅子頭を納める長持ちを設けた神輿屋台を載せ、地区毎の紋や模様のついた幕を張ったものが使われている。神輿の屋根には御幣を付けた角灯籠を付け、「一万度御載大麻」などと書かれ

「一万度御祓大麻」などと書かれている。神輿の正面には、「五穀豊穣」「天下泰平」などと書かれた各灯籠や、太鼓が取り付けられて演奏に用いられている。

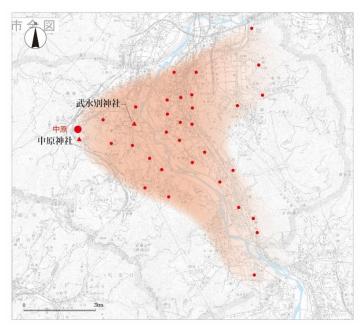


図 2-11 千曲市内の活動中の獅子舞神楽

第2章 千曲市の維持向上すべき歴史的風致

桑原の治田神社などにおいてもお祭りの際に獅子舞神楽が奉納されており、地域を超えて一帯に広がっている。現在、市内では33団体の獅子舞神楽が演じられ、「中原から神楽を学んだ」と伝えるものが多く、その多くは旧更級郡・埴科郡における獅子舞の指導的役割を果たしてきた。

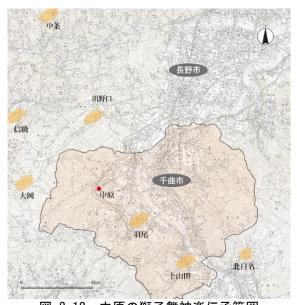


図 2-12 中原の獅子舞神楽伝承範囲 (文献等で明らかなもの)

まとめ

善光寺街道にみる歴史的風致の二つ目は、江戸時代後期の造り酒屋の酒蔵や通りに面した長屋門や土塀、桑原宿の面影を残すうだつや格子戸の建物とともに、伝統的な酒造りと中原の獅子舞神楽である。酒造りは、三峰山系の自然が豊かな良質な湧水を利用して作られる酒米と、仕込み水が同じ水を使っている酒造りは数が少なく、ここでの酒造りの大きな特徴であることから残していきたい歴史的風致である。また、千曲市内はもとより長野市や坂城町など周辺へも影響を与えた民俗芸能の中原の獅子舞神楽は、他に誇れるものであることから、今後も伝承していきたい歴史的風致である。

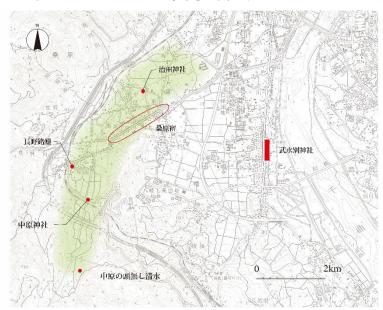


図 2-13 善光寺街道にみる歴史的風致範囲 桑原・中原地区

コラム 栽培リンゴの原木

明治時代、この地域で養蚕が盛んであった頃、和田酒店の和田郡平によって明治22年 (1889) に中原地区でリンゴ栽培が始められた。その当時に植えられた樹齢約130年の栽培リンゴ国光の原木が現存し、秋には現在も実をつけている。このリンゴの原木は、県下で現存する栽培リンゴの原木では最も古いもので、市指定天然記念物として保存し

ている。また和田郡平は、当時村内百余戸に苗木を2 本ずつ配り広くリンゴの栽培を奨励した。

市内では、昭和4年(1929)の世界恐慌により養蚕業が衰退し、桑畑はリンゴ栽培へと転換された。戦後も養蚕は行われていたが、平成2年(1990)の12戸を最後に、以後養蚕農家はなくなった。一方、リンゴ栽培は増加したが、昭和30年代(1955)後半をピークに徐々に減少傾向にある。



写真 現存するリンゴ国光原木

2 武水別神社にみる歴史的風致

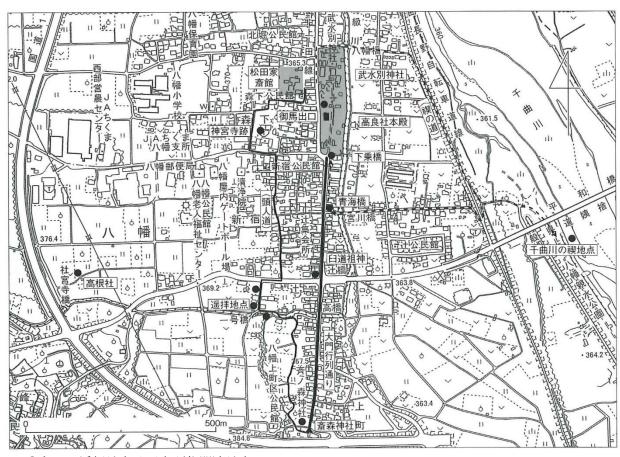
武水別神社は、千曲川左岸の佐野川や更級川の扇状地端部に位置する。八幡地区の中央にあり、「八幡宮」「お八幡さん」の名で親しまれている神社である。

八幡地区は、奈良時代に「東山道」の支道が通り、平安時代の『和名類聚抄』に記載される信濃国十郡のうち「更級郡小谷郷」に比定される。また八幡地区には、「郡」と呼ばれる集落があり、更級郡衙の存在が推定されている。平成の大合併により、更級郡はなくなってしまったが、奈良時代から続いた更級郡の中心的な地域である。

平安時代後期以降は、石清水八幡宮(京都府)の荘園となり、その鎮守として八幡宮が勧請されたと推察される。戦国時代の天文22年(1553)4月に、上杉・武田の第1次川中島合戦が八幡地区一帯で行われた。永禄7年(1564)には、上杉謙信が武水別神社に捧げた願文が「上杉家文書」に収録されている。

武水別神社への交通路は、松本方面へ通じる一本松峠を越える街道(通称一本松街道)が武水別神社を通り、稲荷山宿で善光寺道に合流していた。

八幡地区は、武水別神社を中心に参拝客のための旅館・料理屋・飲食店などの町屋が軒を並べた門前町として形成された町並みである。



●印は、遥拝地点及び大頭祭関連地点

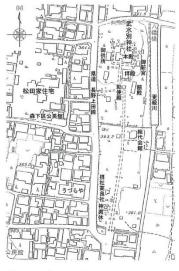
図 2-14 武水別神社・松田家館跡位置

武水別神社の歴史と建物

武水別神社は、延長5年(927)にまとめられた『延喜 式神名帳』に「武水別神社」と記載され、現在地の西側の 山麓にあったと推定されている。現在地にいつ移ったのか については不明であるが、境内に在る最古の建造物が摂社 高良社本殿(16世紀前期の建築)であることから、室町 時代後期には現在地に祀られていたことがわかる。社伝に よると、安和年間(968~970)に、石清水八幡宮(京都府) から八幡三神を勧請し、中世以降「八幡宮」と呼び、江戸 時代の宝暦7年(1757)に「武水別神社」と改めたという。

現在、境内はケヤキの大木からなる社叢となり、長野県天然記念物に指定され、厳粛な雰囲気を感じさせる。南側の大鳥居をくぐり、下乗橋から境内に入ると、廃仏毀釈前の神宮寺に係る唯一の建物「神輿休」と呼ばれる茅葺寄棟造の建物(江戸時代前期の建築)があり、その隣に摂社高良社本殿がある。参道を進み中鳥居をくぐると、左手に酒造祖社などの摂末社があり、正面に勅使殿(舞台)・拝殿・本殿へと続く。本殿の右手に御新宮・額殿、左手に社務所・御供所があり、背面には十二神社などの摂末社がある。

本殿は、天保13年(1842)の火災で焼失後、嘉永3年(1850)に諏訪の宮大工立川和四郎富昌によって建てられた間口5間、奥行6間半の大規模なものである。部材や壁面に多数の彫刻が施されていることが特徴である。正面蟇股には犬親子・猪、両側面中備には亀に乗る仙人(廬哈



) 50 100 200r



写真 本殿・拝殿(手前)



写真 廬哈仙人像

仙人)・鶴に乗る仙人(費長房仙人)、妻の虹梁を支える力士、脇障子の桐・鳳凰・雲・ 麒麟、蟇股の牡丹・翡翠・雀・鶉など動植物の彫刻で飾られている。

武水別神社の頭人行事

毎年12月10日~15日にかけて行われる武水別神社の「大頭祭」は、「お練り」とも呼ばれる新嘗祭の行事で、市内外から来るたくさんの見物人で賑わっている。その起源は明らかではないが、松田宮司家に伝わる『御頭帳』には、江戸時代以前の文禄2年(1593)から現在までの頭人の名前が記されているので、四百数十年にわたり引き継がれ行われていることがわかる。



写真 御頭帳

昭和61年(1986)に、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「武水別神社の頭人行事」として選択されている。

大頭祭を支える武水別神社の氏子は、7郷の3か村21集落(旧八幡村大池・姨捨・ をないかみまちった。あらじゅく・もりした。 峯・上町・辻・新宿・森下・志川・郡・中原・代、旧更級村若宮・芝原・仙石・羽尾・ すざか みしま 須坂・三島、旧五加村上徳間・千本柳・小船山・中)、現千曲市八幡・更級・五加地区 の人びとによって構成されている。

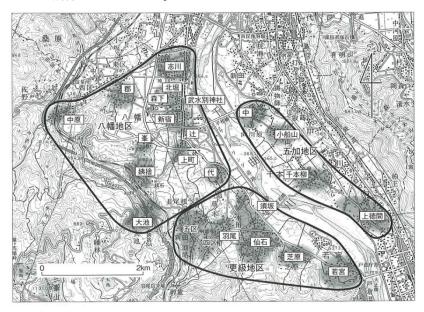


図 2-15 武水別神社の氏子圏

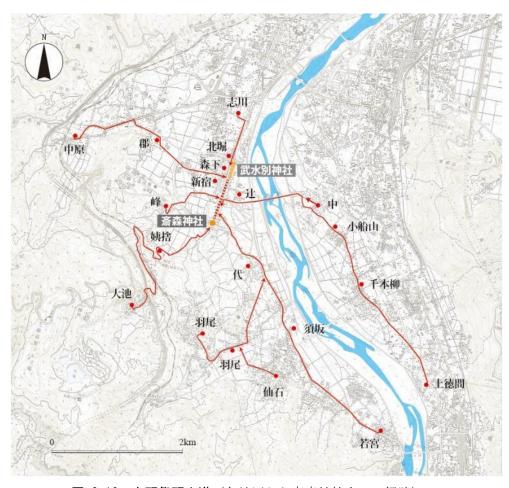


図 2-16 大頭祭頭人道 (各地区から斎森神社までの経路)

大頭祭に奉仕する人のことを「頭人」「頭殿さん」と呼び、頭人は7郷の氏子の中から5人選ばれ、5番頭・4番頭・2番頭・1番頭と順次勤めたうえで、3番頭を勤めることとされていた。最高位である3番頭の頭人を「大頭」と呼ぶことから「大頭祭」と呼ばれる。

頭人はそれぞれの集落から行列を作り、松田家斎館まで来て、出達の儀式の後、裏道を通り斎森神社で練り行列の隊列を整える。

祭りは、1番頭から順に5番頭までの頭人が、毎日一人ずつ、斎森神社から武水別神社本殿まで練り歩く「大門行列」により神饌を神社に運び、翌晩に「御供積み」の行事により神前に供えるものである。斎森神社本殿は、『御頭帳』によれば延享3年(1746)に建立され、棟札から享和元年(1801)に修復された社殿である。

この大門行列を「お練り」と呼び、参道の見物人にみかんや日用品(たわし・軍手・靴下・ティッシュペーパーなど)が「御供」として行列の宝船から撒かれ、それを拾う人びとで大変な賑わいとなる。また、境内には露天商が軒を並べ、昭和30年代まではサーカスや見世物小屋も立ち、遠方からの見物人が連日数万人も来て大いに賑わった。現在は見世物小屋は立たなくなったが、境内は露天商が軒を並べ、その間を頭人の行列が本殿へと練り歩く。



写真 神饌を頭上に御供積み



写真 神社へ練り込む大門行列



写真 宝船から御供捲き

武水別神社神主 松田家

武水別神社の神主は、代々松田家が務めてきた。天正 10 年 (1582) 織田信長の死後、 上杉景勝は善光寺平を統治し天正 12 年 (1584) 稲荷山城の築城に際して、八幡神領の 管理を松田織部 祐 に命じた。以後、松田氏が代々武水別神社の神主職を継承してきた。

松田氏の居館が、武水別神社に隣接する「松田家館跡」で、屋敷地約2,000坪の周囲を堀と土塁で囲んでいる。松田家では、四百数十年にわたり居館を神主屋敷としてきた。現在、堀の一部は道路敷や宅地として埋めたてられ、また土塁の一部は削平されてはいるが、ほぼ戦国時代の面影を残している。保存状態が良く、他に例をみない神主屋敷であることから、県史跡に指定されている。



写真 元治元年 (1864)「八幡社領測量御圖帳」附図 [『松田家文書』]

屋敷内には、18世紀前期に建てられた寄棟造で茅葺の主屋をはじめ、幕末期の斎館、明治期の新座敷など12棟の建物や門、土塀が残っていたが、平成29年9月6日に発生した火災により、主屋、斎館、新座敷、味噌蔵及び料理の間が焼損した。

主屋は、平面形式や内装、禊用の湯屋等に特徴がある神主の住宅で、県内屈指の屋敷

構えを持ち、長野県の建築史上貴重な建物であった。

斎館は、文久元年(1861)に再建された間口7間、 奥行3間半の寄棟造瓦葺の建物で、神殿が設けられた 儀礼用の建物であった。平成30年に修復を終え、現 在も、仲秋祭での神楽の披露や大頭祭での出達儀式の 場として使われている。

松田家の近世初期から近代にかけての建物群は、屋敷地を含めた屋敷構えが歴史的にも宗教史上的にも貴重な建物群であり、保存し継承していくべきものである。



写真 松田家住宅主屋 (焼損前)

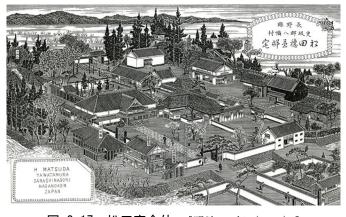


図 2-17 松田家全体 [明治34年(1901)]



写真 斎館(修理後)

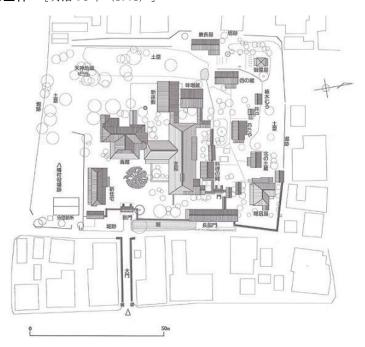


図 2-18 松田家建物配置

[『松田家住宅建築史報告書』]

たいかん 斎館での祭事

松田家斎館では、大頭祭において前庭に「オハッカイ」と呼ぶ祭り期間だけの仮の遥拝所を設け、頭人の出達儀式が行われている。また、9月14日の仲秋祭においては、斎館前で神前に奉納する獅子舞神楽がまず神主へ披露され、その後境内拝殿前で奉納される。このように、斎館は現在でも儀式の場としての役割をもった建物である。



写真 仲秋祭で神楽を披露



写真 大頭祭での出達儀式

まとめ

武水別神社の大頭祭は、『御頭帳』で明らかなように文禄2年(1593)から現在まで、一度も中断することなく四百数十年も引き継がれてきた伝統行事である。また、この行事には、八幡・更級・五加地区の人びとが関わっている。武水別神社の大頭祭は、秋の収穫が終わり厳しい冬の訪れを告げる風物詩である。武水別神社社殿はじめ、松田家の神主屋敷の斎館などとともに、将来にわたり守り伝えていきたい歴史的風致である。

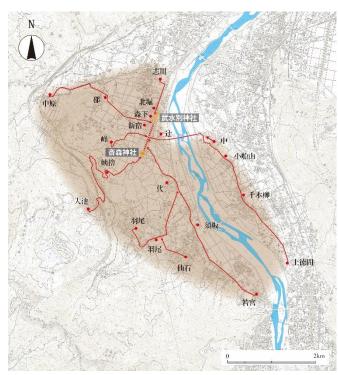


図 2-19 武水別神社にみる歴史的風致範囲

コラム 社宮司遺跡出土の六角宝幢

武水別神社から1km ほど南の社宮司地籍において、国道バイパス建設に伴う社宮司遺 跡の発掘調査で、木製ではわが国で唯一の「六角宝幢」(県宝、木製の塔婆)が出土した。 平安時代の10世紀末~11世紀初頭の遺物で、高い仏教色をもつ資料であり、天暦5年 (951) にまとめられた『大和物語』に登場する姨捨山や、更級郡衙に関係する遺跡とし て注目される考古資料である。こうした資料からも、平安時代末期の八幡地区には、高 い教養や文化的な素地があったことがうかがわれる。



六角宝幢の仏画 (一部) [長野県立歴史館提供]

3 更級の名月と姨捨の棚田にみる歴史的風致

^{かむりきゃま} 冠 着山 (標高 1, 252m) 山麓の更級地区は、平安時 代から『古今和歌集』や『万葉集』に多数の和歌が詠 まれ、「更級」は月の名所として広く知られてきた。 高くそびえる冠着山は古くは、「姨捨山」と呼ばれて いたが、中世以降、特に近代においては、より身近に 行くことができる長楽寺周辺が「姨捨山」と呼ばれる ようになった。松尾芭蕉をはじめとした文人墨客が訪 れ、現在に至っても名月とともに「田毎の月」と称さ



姨捨の棚田と仲秋の満月

れた棚田同様、俳諧や絵画、文学作品の題材とされている。

三峰山山麓斜面に広がる棚田は、平成11年5月に名勝「姨捨(田毎の月)」として、 農耕地の水田では我が国で初めて文化財指定を受けた。さらに、平成22年2月には名 勝指定地を含めた棚田地域、水源地・更級川など 64.3ha が重要文化的景観「姨捨の棚 田」に選定されている。

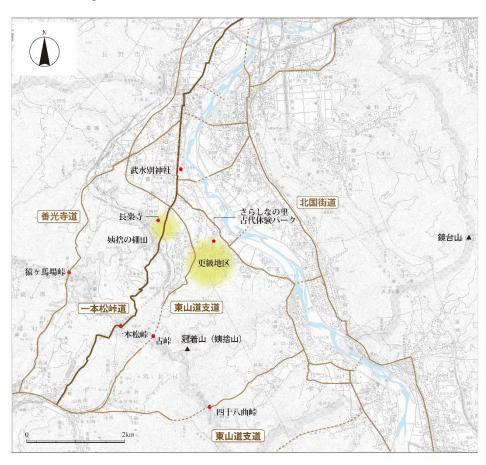


図 2-20 千曲市内の街道と姨捨・更級地区の位置

更級(姨捨山)の名月

冠着山は、平安時代には「姨捨山」と呼ばれ、延喜5年(905)に編纂された『古今和歌集』に所収された和歌「我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」(作者不詳)に初めて登場する。また天暦5年(951)頃まとめられた『大和物語』第56話の棄老説話(年老いた母を山に捨てる・・・)が有名である。永久元年(1113)の『俊頼髄脳』にも、姨捨山を「冠の中子に似た山」と記していることから冠着山を指している。

滝沢貞夫氏によれば、『古今和歌集』から建保4年(1216) 頃まとめられた『新古今和歌集』までの和歌集の中に収められた信濃国関係の歌数は4,115首あり、そのうち「更級」や「姨捨」の詠まれたものは信濃全体の4割ほどであるという。『古今和歌集』以後、姨捨山は月との関わりを持つ歌枕として定着し、多くの和歌が詠まれたことがわかる。

天正6年(1578)の狂言本『木賊』では「おはすて山、

田ことの月、さらしなの里・・・」と、姨捨山と田毎の月を別記しており、当時は別々の名所であったとみられる。正保4年(1647)の長野県最古の絵図「信濃国絵図」では、長楽寺周辺に「姨捨山」、冠着山は「冠着嶽」と記されていることから、この頃から長楽寺周辺を姨捨山と呼ぶようになったようである。冠着山(姨捨山)と比べると

容易に足を運ぶことができる「田毎の月」の方が次第に 有名になり、やがて「田毎の月」のある長楽寺周辺が「姨 捨山」と呼ばれるようになったものと考えられている。

松尾芭蕉が姨捨に月見に訪れたのは、貞享5年(元禄元年、1688)のことで、『更科紀行』をまとめている。明和6年(1769)には、「芭蕉翁面影塚」が芭蕉門人の加舎白雄や宮本虎杖などによって、長楽寺境内に建てられた。この文学碑が最初のもので、以降多くの文人たちが、俳諧を楽しみつつ作品を残している。今では、高浜虚子など46 基の碑が境内に並ぶ。

絵画で特に著名なものに、幕末の嘉永6年(1853)歌川 広重晩年の作品『六十余州名所図会』所収の「信濃更科 田毎月鏡台山」があり、一つ一つの水田に月を描き、あ たかも姨捨では全ての田んぼに月が映って見えるという 「田毎の月」のイメージを広めた作品がある。



写真 冠着山(姨捨山)



写真 芭蕉翁面影塚



写真 歌川広重作「信州更科田毎の月」 [長野県立歴史館所蔵]



写真 加舍白雄句碑



写真 境内に並ぶ句碑

近年の文学作品には堀辰夫の「姨捨記」、津村信夫の「姨捨」、井上靖の「姨捨」、山本茂実の「わが心の姨捨山」など多くの作品がある。

当市では、俳句を親しむ人びとが多いことや、長楽寺での月見が行われてきたことから、昭和59年(1984)から「信州姨捨観月祭 全国俳句大会」が毎年仲秋の満月の頃に行われ、全国から多数の作品が寄せられている。



図 2-21 姨捨山(冠着山)の名月観賞地点



写真 歌川広重作 田毎の月

ちょうらくじ 長楽寺

名勝「姨捨(田毎の月)」長楽寺地区にある長楽寺の創建については不明であるが、信濃三十三番観音霊場第14番札所に数えられ、札所の成立が寛文6年(1666)以前とされることから、長楽寺の建物はそれ以前には整っていたとみられる。現存する建物の建築年代から、松尾芭蕉が訪れた貞享5年(元禄元年、1688)頃の建物はなく、加舎白雄らが明和6年(1769)に「芭蕉翁面影塚」を建てた頃には、現在の観音堂が建っていたとみられる。

観音堂 間口2間、奥行2間の宝形造茅葺の建物で、本尊聖観世音菩薩像を安置している。虹梁の絵様、拳鼻・実肘木の形式から宝暦・明和期(1751~71年)の建築と推定され、虹梁に「文化十二乙亥」の落書きがあり、文化12年(1815)以前の建物であることがわかる。

月見堂 間口2間、奥行2間の宝形造茅葺の建物で、月見のできる東・南側を雨戸と障子とし、西側に床の間を設けている。建築年代は、天保期(1830年代)。本堂・庫裏 間口4間半、奥行6間の切妻造、板葺で、1間の向拝を付けている。建築年代は、低い根太天井を張って中二階を設ける形式から、文化・文政期(1804~29年)頃と推定される。



写真 長楽寺全景



写真 姨石の寄り添う観音堂



写真 月見堂と芭蕉翁面影塚

月見殿 本堂・庫裏と1間の通り畳廊下を隔てて接続し、

間口2間、奥行6間の入母屋造、茅葺の建物である。内部は、8畳間3室に襖で仕切

られている。建築年代は、虹梁の絵様に幕末の特徴があり、嘉永2年(1849)より少し前と推定されている。

姨捨の棚田

姨捨の棚田の起源は明確ではないが、永禄7年(1564)の上杉謙信願文や、天正6年(1578)の狂言本『木賊』に「田毎の月」と記述があることから、その頃には一部ではあるが沢から水を引いて水田化され、棚田景観が形成されていたとみられる。現在のように斜面全体が水田化されるのは、江戸時代の初めにため池の「大池」が造られて以降のことである。

姨捨の棚田は、背後の三峰山の山体の一部が崩落(約13,000年前・3,000年前の2回)した「姨捨土石流堆積物」上に形成されている。水田の水は、三峰山山腹からの湧水をため池を造って貯水した水を、自然河川の更級川を使ってため池から棚田地域まで流し、大口分水工や宝が沢取水口などから水を引き、堰を設けて棚田地域全体に配水している。さらに、堰から取水した水は上部の



写真 姨捨の棚田



写真 三峰山山麓斜面の棚田

水田から下部の水田に畔を越して水が満たされる「田越し灌漑」手法で、全ての水田に水が行きわたるように工夫している。

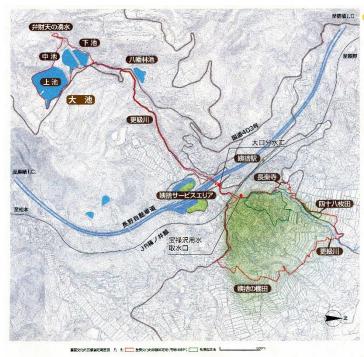


図 2-22 重要文化的景観「姨捨の棚田」選定範囲

ため池の大池は、上池・中池・下池の3つから構成されている。総貯水量は26万t、約82haの田畑を潤している。弁財天の湧水は一番大きな上池に貯水され、満水となった水は余水吐を通して中池に流れ込む。中池は下池とつながり、満水になれば余水吐から更級川に流される。下池は常時満水になるよう中池の水量が調節され、下池の樋を抜き大池の水を棚田地域へ流し水田用水として利用できるよう耕作者らによって管理されている。

棚田の土は、粘質度の高い水田土壌であることから、水田床土の下部に石積みの暗渠を設けた「ガニセ」「ガニ」と呼ばれる排水施設を施していることも特徴である。



写真 田越し灌漑



写真 田越し灌漑

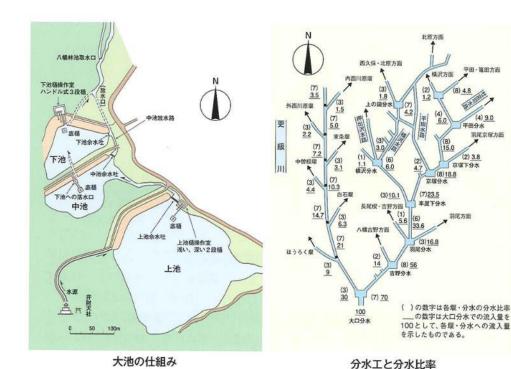


図 2-23 大池の構造と分水工配水率

ため池や堰などの水利施設の維持管理、配水手法などは、江戸時代以来の慣習として 耕作者によって行われてきた。現在は、耕作者で構成する千曲市西部土地改良区に引 き継がれている。特に、どこの分水工でどの堰にどれだけの水を流すのかが細かく決 められ、それに基づいて無駄な水を流さない工夫がされ、代々守られている。また、各 堰は、堰を利用する耕作者によって堰浚いや、維持補修などの管理が行われている。 また毎年5月中旬に、初めて下池の樋が抜かれる「初樋」には、改良区役員が大口分水工の脇にある水神社に参拝し、耕作の安全や豊穣を祈願している。9月6日には、弁財天の湧水の水源に設けた水神社に改良区役員一同が参拝して豊作を祈願する行事が江戸時代より引き継がれ、耕作が行われている。



写真 姨捨の棚田での耕作

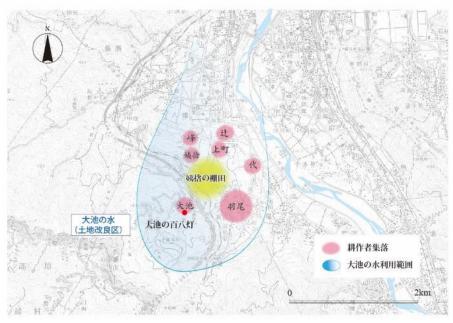


図 2-24 大池の水利用範囲と棚田耕作者集落

大池の首八灯

大池集落は姨捨の棚田上部にあり、現在は鉄道と高速 道路により分断されてしまったが、大池集落の人も姨捨 の棚田の耕作を行っている。江戸時代には「大池新田村」 と呼ばれ、大英寺(現長野市松代)領であった。この大 池集落では、「大池の百八灯」と呼ばれる小松姫供養の 送り火行事が、四百年も毎年欠かさず行われている。

この行事の起源は、江戸時代まで遡る。本多忠勝の娘で徳川家康の養女となった小松姫が、元和4年(1618)



写真 小松姫供養の百八灯

に上田藩主真田信之のもとに嫁ぐ時に化粧料として大池新田村が与えられた。元和6年(1620)に小松姫が若くして亡くなり、元和8年(1622)に松代に移された信之によって小松姫供養のために大英寺が建立され、大池新田村は大英寺領となった。その頃から、大池新田村では「大皓庵」と呼ぶお堂を建てて供養するとともに、お盆の8月16日の夕方送り火を焚いて小松姫を供養するようになったという。また小松姫の命日の2月24日には、だんごを作り供養してきた。

百八灯は、更級川をはさんだ大池集落の対岸の「大道」と呼ぶ一本松峠に通じる道沿いに、2mほどの間隔にわら束を108個並べ、夕方上手から火をつけ送り火とするものである。

領主ともいえる小松姫を供養する伝統行事が、現在 も大池集落の人びとによって毎年行われている。また 大皓庵は、昭和29年(1954)に取り壊され地区公民館 に建替えられたが、公民館内に小松姫を祀る仏壇が設 けられ、毎年行われる区民総会時に、区民みんなで供 養している。



写真 108 個並べられたわら束

まとめ

更級地区や八幡地区の姨捨周辺は、古く平安時代から京の都でも知られた月の名所であった。中世以降に耕作が始まったとみられる姨捨の棚田は、江戸時代にさらに棚田が拡大するとともに、長楽寺や棚田が観月の名所となり、多くの文学作品や絵画が創作された。

更級の名月や姨捨の棚田一帯は、古くから観月の地とされ現在に引き継がれている。 月や棚田をとおして歴史的風致が形成された棚田景観は、将来にわたり守り活用を図っていきたい歴史的風致である。

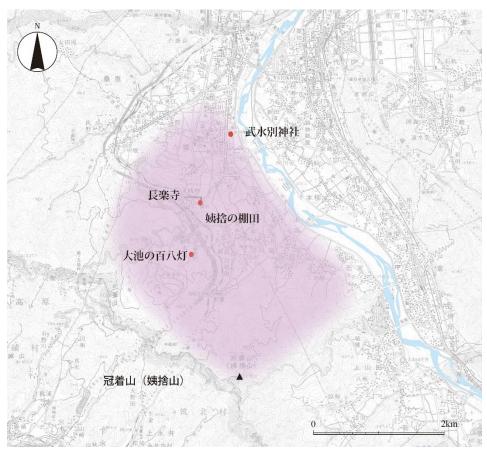


図 2-25 更級の名月と姨捨の棚田にみる歴史的風致範囲

コラム 姨捨駅

姨捨駅は、姨捨の棚田の玄関口というべき位置にある。明治33年(1900)に開通した鉄道篠プ井線(塩尻~篠ノ井)に設けられた駅舎である。当時は蒸気機関車で、25‰の急勾配を登ってきた機関車の水の補給所として設けられ、急傾斜地であるために駅にはスイッチバック方式で停車する構造となっており、現在も同様である。現在の駅舎は、昭和9年(1934)に建てられた大正モダニズムの雰囲気を感じさせる木造駅舎である。

姨捨駅周辺からの長野盆地(善光寺平)の眺望は、 日本鉄道三大車窓に数えられており、直下には棚田を 望むことができる。近年では、戸倉上山田温泉宿泊者 を対象に夜景ツアーが行われ、夜景ポイントとして注 目されている。



写真 スイッチバックの姨捨駅



写真 姨捨からの善光寺平の夜景

4 戸倉上山田温泉にみる歴史的風致

戸倉上山田温泉地区は、明治元年(1868) に千曲川左岸の河原に温泉が発見され、明治26年(1893) に戸倉温泉、明治36年(1903) に上山田温泉が開湯された。その後、千曲川右岸に新戸倉温泉が開湯された。これらの温泉を総称して「戸倉上山田温泉」と呼んでいる。

戸倉上山田温泉の最盛期は昭和48年(1973)頃で、宿泊者数が年間100万人ほどあり、長野県内では、上諏訪温泉(諏訪市)や浅間温泉(松本市)、湯田中温泉(山ノ内町)などとともに団体旅行で賑わいをみせていた。旅館やホテルの多くは、その頃に建替えられた建物が多く、昭和のイメージが残る温泉街となっている。

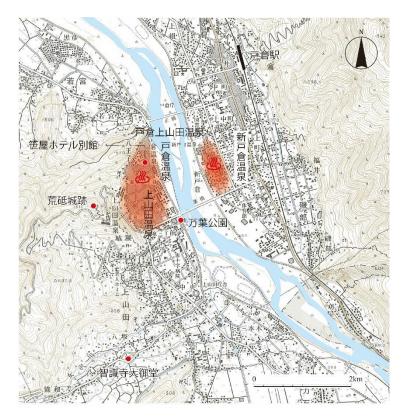




写真 戸倉上山田温泉街



写真 笹屋ホテル別館客室

図 2-26 戸倉上山田温泉位置

温泉街

戸倉上山田温泉街の一画にある笹屋ホテル別館は、昭和7年(1932)に建てられた建物で、帝国ホテル設計者のフランク・ロイド・ライトの弟子である建築家遠藤新の設計による木造和風旅館建築である。畳式の座敷と一段下がった椅子置きの広縁から庭に至る客室構成は、後の旅館建築に大きな影響を与えた。現在登録有形文化財となり、志賀直哉が逗留し「豊年蟲」を執筆したことから「豊年虫」と名付けられ、客室として使用されている。

ほかにも、木造2階建の旅館建築が温泉街に点在しており、昭和のイメージが残る温 泉街を形成している。 昭和60年(1985)に千曲川左岸の堤防脇に設置された千曲川万葉公園には、千曲川に関わる万葉歌碑や文学碑が32基あり、戸倉上山田温泉の散策コースとして親しまれている。

しなの 信濃なる ちく万の川のさゝ礼志も きミ之不みて者 玉と比ろ者舞 (佐々木信綱揮毫) [万葉集巻+四歌 作者不詳]



写真 千曲川万葉公園

千曲川納涼煙火大**会**

平成27年度の開催で85回と歴史を重ねる納涼煙火大会が、毎年8月7日に開催されている。戸倉上山田温泉街を正面とするように、温泉街前の千曲川河原で行われ、市内外からの大勢の見物客は堤防上や河川敷から花火を見る。この辺りは、千曲川を挟み両岸に山が迫っているので、打ち上げの音が山々にこだまし、ひときわ大きく響き迫力のある花火である。



写真 河原での煙火大会

戸倉上山田温泉夏祭

戸倉上山田温泉夏祭は、毎年7月中旬の2日間開催される水天宮のお祭りである。

千曲川の河原に湧く出湯から明治36年(1903)に開湯され発展した上山田温泉は、川の氾濫により幾たびもの水害に見舞われた。温泉街の人びとは、水神の怒りを鎮める祭りとして大正13年(1924)に、温泉街の中心に水天宮を堤防上の本水天宮より分祀し水天宮祭を行ったことが温泉夏祭の本来の姿である。

昭和3年(1928)昭和天皇御即位を祝して勇獅子が温泉街を練り歩き、昭和49年(1974)からは御神体神輿が制作され、勇獅子とともに温泉街を練り歩くようになった。その後、彦神輿と姫神輿、さらに女性が担ぐ芸妓連神輿と参見番神輿(後に華神輿の雅・葵)2基が加わり、現在5基の神輿と勇獅子が練り歩く祭りとなっている。



写真 昭和11年(1936)の夏祭 [『上山田の百年』]



写真 勇獅子

祭りは、住民有志が中心となり観光協会・旅館組合・上山田地区の力石・三本木・新山・八坂・温泉中央自治会などで構成する実行委員会により行われている。祭り1日目は、水天宮での神事により始まり、子供神輿や上山田地区の各自治会による手作りの山車十数基ほどが温泉街を練り歩き、夕刻厳かな雰囲気の中松明行列を先頭に御神体神輿が続き、水天宮前で練り込みをおこなった後、安置所へ神輿を安置して第1日目の祭りが終了する。

第2日目は本練りとなり、勇獅子はお囃子さんと芸妓さんを乗せた山車を引き、「どっこい、どっこい」の掛け声とともに温泉街を練り歩く。巡行路の各所に設けられた神酒所や旅館の前で立ち止まり、山車の芸妓さんが手踊りを披露する。神輿は、男性が担ぐ彦神輿と姫神輿、女性が担ぐ華神輿の計4基が勇獅子の後に続き、終番では彦神輿と姫神輿の双方に女性が4名ずつ乗って祭りを盛り上げ、祭りは終わる。



写真 子供神輿

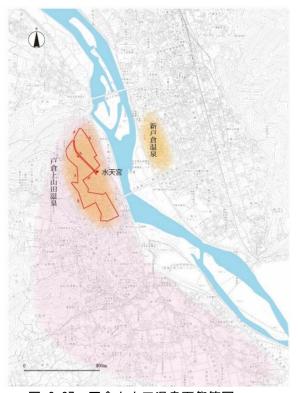
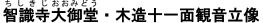


図 2-27 戸倉上山田温泉夏祭範囲

温泉夏祭をはじめ、智識寺の十一面観音の春祭りや地区の神社の祭り、新築の家やお祝い事など上山田地区の行事で、上山田太々御神楽が披露されている。

この神楽も、中原の獅子舞神楽が上山田地区(力石・ やきか あらやま じょうよう 八坂・新山・城腰集落)に伝承され、演じられてきた。 昭和46年(1971)に上山田神楽保存会が結成され、現 在に続いているもので、市指定文化財である。



温泉街から徒歩 20 分ほどのところにある智識寺は、 真言宗の寺院で、地元や周辺地域の人びとが参拝に訪れる。この本堂は重要文化財に指定され、「大御堂」と呼ばれている。間口3間、奥行4間の寄棟造、妻入の茅葺のお堂である。正面1間を吹き放ち、後ろの方3間を内陣とし、周囲に切目縁を廻し、擬宝珠高欄を付けている。



写真 各地区の山車



写真 華神輿



写真 上山田太々御神楽



写真 智識寺 大御堂

建築年代は、室町時代末とみられている。寺伝では、天文 10 年 (1541) の再建という。また初めは 冠 着山の麓曽根堂にあり、天文年間 (1532-1554) に現在地に移設されたという。あるいは、慶長 14 年 (1609) に現在地に移ったともいう。慶長 14 年の棟札が、昭和 28 年 (1953) の修理の際に見つかっている。

大御堂には、像高3mもの大きな木造十一面観音立像が安置されている。頭部・体躯共木の一木造りで、わずかに両手肘外側に薄く矧木し、また両手首を矧付けているのみである。頂上仏・化仏をも頭部の共木から彫出した完全な一木造りで、平安時代後期の作とみられ、重要文化財に指定されている。

また智識寺境内周辺は、「智識の杜公園」として整備され、あじさい寺として、あじさいの花のシーズンには参拝者が多い。



写真 十一面観音立像

まとめ

戸倉上山田温泉は、開湯 120 年の歴史を有する長野県屈指の規模を誇る温泉街である。千曲川の河原に開湯され、温泉旅館を中心に温泉街が展開し、中には後の旅館建築に大きな影響を与えた和風旅館建築もあり温泉街を形成している。

また、度重なる千曲川の水害から温泉街を守るために祀った水 天宮の祭りとして始まった温泉 夏祭は、発展し戸倉上山田温泉 夏祭として賑わい、河川敷での納 涼煙火大会とともに、夏の風物詩 となっている。

さらに、重要文化財の智識寺大 御堂や十一面観音立像と、地域に 伝承される十一面観音信仰や 太々御神楽は、地域の人びとによ って守り伝えられてきた歴史的 風致を形成している。

歴史のある温泉街や智識寺大御堂とともに、千曲川納涼煙火大会や温泉夏祭、大々御神楽は引き続き残していきたい歴史的風致を形成している。

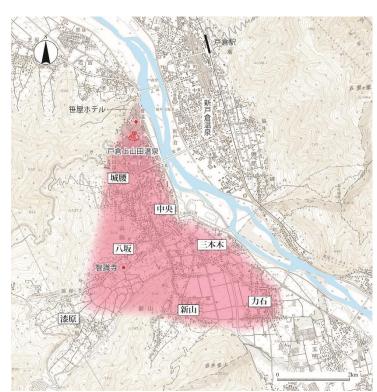


図 2-28 戸倉上山田温泉にみる歴史的風致範囲

コラム 荒砥城跡

戸倉上山田温泉のすぐ上にある城山に築かれた山城である。5つの曲輪があったとみられるが後世の改変が著しく、築城年代など詳細は不明である。

天文22年(1553)上杉・武田の第1次川中島合戦の頃に、在地の武士屋代氏は武田信玄から荒砥城を与えられた。天正10年(1582)武田氏が織田信長に討たれた頃には、上杉氏に仕えていた屋代氏から、上杉景勝は荒砥城を取り上げ直轄城とした。



写真 戦国時代の山城に再現

天正 11 年 (1583) 徳川家康は、屋代氏に更級郡を与えることを約束し味方につけた。 天正 12 年 (1584) に、屋代氏は上杉氏に背き荒砥城に籠るが、上杉方から攻められ徳川 方に敗走した。こうして荒砥城は、廃城となったという歴史をもっている。

現在、荒砥城跡は平成7年(1995)に当時の山城の姿に再現され、史跡公園として整備し広く公開されている。また、NHK大河ドラマ「風林火山」や「江」はじめ、テレビドラマなどの撮影のロケ地としてもしばしば利用されている。

5 北国街道にみる歴史的風致

北国街道は、江戸時代五街道に数えられる中山道と北陸道を結ぶ街道で、信濃追分宿(現軽井沢町)で中山道と分かれ、越後国出雲崎宿(現新潟県出雲崎町)までの街道である。佐渡の金銀が江戸に運ばれたほか、加賀前田藩の参勤交代に使われるなど、越後や北陸と江戸を結ぶ主要な街道の一つである。

千曲川右岸の山裾を南北に通り、上戸倉宿・下戸倉宿、矢代宿から千曲川を矢代の渡しで渡り、篠ノ井追分宿(現長野市篠ノ井)へと続き、善光寺街道と合流し善光寺へ向かうものである。



図 2-29 千曲市内の街道と下戸倉宿・矢代宿

かずかみ ふ な やま (1) 水上布奈山神社本殿

重要文化財に指定されている水上布奈山神社本殿は、慶長8年(1603)に北国街道の宿場である下戸倉宿が設置された時に、その鎮守として諏訪大社より建御名方神を勧請して創建されたと伝えられている。現在の本殿は、寛政元年(1789)に諏訪の大隅流宮大工柴宮長左衛門矩重によって建替えられたものである。



写真 大隅流の水上布奈山神社本殿

近年では、昭和59年(1984)に覆屋が建替えられ、 平成19・20年(2007-08)に本殿の修理が行われた。

本殿は間口 10 尺(3.03m)の一間社流造、正面に 軒唐破風を付け、屋根を 柿 で葺く。この本殿の特 徴は、各部に多用された彫刻である。彫刻は、ケ ヤキの白木に施し彩色はせず、数が多い。虹梁に 「上り龍・下り龍」を丸彫りし、また脇障子上の 束にも「上り龍・下り龍」を彫刻しているのをは



写真 拝殿前に立てられた2本御柱

じめ、正面虹梁上に「松に鶴」、唐破風内に「鳳凰」、側面小壁に「波に亀」「飛龍」、 脇障子に「竹林の七賢人」、正面両脇に「仙人像」、縁下に「唐獅子」「蘇鉄に兎」な どの彫刻を施している。

水上布奈山神社の御柱祭

水上布奈山神社の御柱祭は、諏訪大社と同様に行われ、本殿正面に一之柱と二之柱の2本が7年毎に立替えられている。前回は平成28年(2016)4月に執行され、次回は平成35年(2023)に予定されている。千曲市内の諏訪神を祀る神社には、ためられている。千曲市内の諏訪神を祀る神社には、ためられている。千曲市内の諏訪神を祀る神社には、ためられている。特別をはいたでは、もりおおみでにいて、ためられている。

水上布奈山神社での御柱祭の起源は、文政7年(1824)の記録があり約200年の伝統がある。 下戸倉宿、現在の戸倉地区今井町・中町・上中町・上中町・ 上などでもおれた地上町・新戸倉温泉の五町が、順番に奉納することとされている。2本の御柱は、戸倉地区の山林から赤松の大木を切り出し、「山出し」は氏子の曳く網や木遣唄で奉置所まで曳行する。「里曳き」は昭和61年(1986)から、交通事情により北国街道であった国道18号線から市道大西線に変更され、地区内を曳行し神社まで行われる。御柱とともに木遣、3艘の舟、神楽、金棒つきの子供や踊り連などの行列が賑やかに町中を練り歩く。曳行された御柱は、神社本殿正面左右に1本ずつ立てられ祭りは終わる。



写真 御柱の曳行



図 2-30 御柱の曳行経路

北国街道の下戸倉宿周辺は、国道 18 号線に変わり街道に面した町家は少なくなったが、当時を偲ばせる町家や、江戸時代から続く造り酒屋の大きな茅葺の建物が北国街道の様子を現在に伝えている。

す す き みずじんじゃほんでん 須須岐水神社本殿

てもとぐらしゅく 下戸倉宿を下った次の宿が矢代宿で、ここから松代方面への松代道、千曲川を杭 瀬下渡しで越えて稲荷山宿、北国西往還につながっている。北国街道が鍵の手に曲が るところに須須岐水神社があり、当時は「矢代山王宮」とも呼ばれ、日吉山王を祀っ ている。現存する本殿は、天保14年(1843)の矢代宿の火災により焼失し、嘉永5

年(1852)に再建された。再建にあたっては、武 水別神社の建築に来ていた諏訪の立川流宮大工 立川和四郎富昌に依頼し、総費用 500 両ほど要し たとの記録が残る。当時の神社建築を代表する諏 訪の宮大工、立川流と大隅流の二流派の神社建 築が、北国街道の隣り合う宿場に建てられたので ある。



立川流の須須岐水神社本殿

須須岐水神社の春祭り

須須岐水神社の祭事は、屋代10 町 (本 町・中町・横町・西横町・宮本町・高見 町・ 田町・下横町・神明町・新町)の氏子により執り行われている。5月3日の春祭り

には神輿の町内巡行、山車の曳行、子ども神輿の 巡行が行われている。また、祭り当日の拝殿前に 「一つ物」の道具が飾られ、かつての祭りの様子 を今に伝えている。

かつては、須須岐水神社において雨宮 坐日吉 神社の祭礼「御神事」に、須須岐水神社の神輿の 雨宮唐崎渡御が行われていた。これは、須須岐水 神社も雨宮坐日吉神社もともに山王社を勧請して おり関係が深く、両社の大祭は同じ日に行われて いた。明治5年(1872)に松代県の廃止に伴って、 神輿の雨宮唐崎渡御は廃止されたが、「一つ物」と 呼ぶ行列が昭和35年(1960)までは、屋代の町内 を練り歩いていた。

一つ物は、須須岐水神社の神輿の唐崎渡御行列 の中心を成すもので、山鳥の尾羽を笠に挿し馬に 乗った童子の前後を武者や従者を従えた総勢百数 十人の行列のことである。明治5年以降は、神輿 の町内巡行の行列を「一つ物」と呼んでいた。

北国街道の矢代宿周辺では、道路拡幅により街 道の様子を伝える建物は少なくなったが、神社前 の通りが鍵の手に折れ曲がる地割が良く残ってい る。



写真 神輿巡行



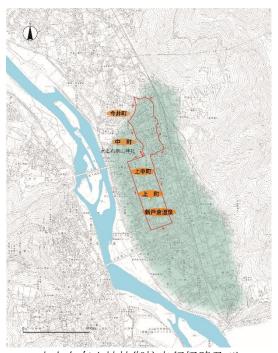
一つ物行列 昭和 10年(1935)



北国街道は須須岐水神社に つきあたり右に曲がる

まとめ

北国街道の隣り合う宿場に、当時の諏訪の二大宮大工の大隅流と立川流の神社建築があたかも競い合うように建てられた。そうした神社を中心に、街道に面した宿場町から発展した戸倉・屋代地区には、神社の特徴的な建造物とともに、それぞれに祭礼が現在に引き継がれ歴史的風致を形成しており、今後も守り受け継いでいきたい歴史的風致である。



水上布奈山神社御柱曳行経路及び下戸倉宿にみる歴史的風致



須須岐水神社神輿巡行経路及び 矢代宿にみる歴史的風致

図 2-31 北国街道にみる歴史的風致

コラム 坂井銘醸酒蔵

坂井家は、下戸倉宿で酒造業を営み「下の酒屋」と呼ばれ、現在坂井銘醸㈱として酒造業を続けているが、この地での酒造りは行っていない。宝暦 10 年 (1760) 頃に建てら

れた茅葺の主屋や、寛政蔵・慶応蔵・明治蔵・大正蔵・昭和蔵など8棟が登録有形文化財として保存され、酒造道具類や所蔵資料の展示場や酒類販売所、飲食店として活用されている。また、所蔵資料には、江戸時代に芭蕉門下の俳人加舎白雄が長く逗留したことから白雄関係資料があり、また明治期には旅館業を営んだことから、竹久夢二はじめ文豪らの資料も多数所蔵されている。



写真 坂井銘醸㈱ 主屋

あめのみやにいますひょしじんじゃ 6 雨宮坐日吉神社にみる歴史的風致

雨宮地区は、千曲川右岸に形成された自然堤防上に営まれた、矢代宿で北国街道から分岐した松代道沿いの集落である。この地区にある雨宮坐日吉神社の祭礼に、重要無形民俗文化財「雨宮の神事芸能」(御神事)があり、氏子である地域住民によって伝承されている。

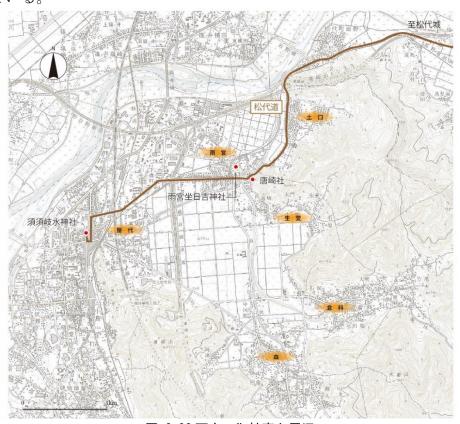


図 2-32 雨宮の御神事と周辺

雨宮坐日吉神社

古くは「雨宮山王宮」と呼ばれ、祭神を日吉大社(滋賀県)より勧請し、明治元年(1868)に現在の「雨宮坐日吉神社」と改められた。

本殿は間口2間3尺、奥行3間の流造で、拝殿は間口7間、奥行4間の入母屋造で、ともに江戸後期の建築である。拝殿に接して左側に御供所があり、廊下で社務所につながっている。

境内には、通りに面した大鳥居を入ると、「黒門」と呼ばれる中門があり、拝殿へと続いている。中門の左手に 宝蔵庫があり、神輿をはじめ祭りの衣装や道具類が保管 されている。

表通りには、かつての街道を偲ばせる明治期の長屋門 や土塀で囲む住宅などが点在している。祭りの際には表 通りに灯籠が並べられ、通りを賑やかに飾っている。



写真 拝殿と本殿



写真 黒門、左に宝蔵庫

ごじんじ御神事

雨宮の神事芸能は、「雨宮の御神事」「獅子踊り」とも呼ばれる雨宮坐日吉神社の祭礼行事である。御神事の起源は明確ではないが、松代城まで出向き御神事踊りを藩主に披露している絵図[真田宝物館蔵、文政年間(1818-29)]から 200 年以上の歴史がわかる。明治5年(1872)までは、屋代村も加わり屋代田んぼ周辺一帯の村々の合同の祭りであった。以後、明治22年(1889)の雨宮縣村合併までは、雨宮・森・倉科・生萱・土口の旧5か村合同で行われていたが、合併後合同で行われなくなり、しばらくはそれぞれの村ごとに行ってきたがそれも途絶え、現在雨宮地区のみで行われ続けている。雨宮地区でも、昭和47年(1972)までは毎年4月29日に行ってきたが、以後3年ごとに行われるようになり、現在に至っている。

祭りは、社殿での遷座式の神事後、「町太鼓」と呼ぶふれ太鼓の合図で、祭り装束に整えた諸役が社前に参集して始まる。中心となる「御行司」は、烏帽子をかぶり猿田彦の面をつけ、高下駄を履き、大太刀・大団扇を持ち社殿を背に立つ。御行司の大団扇の合図で、「朝踊り」「城踊り」と呼ぶ御神事踊りが行われる。笛・太鼓・歌に合せて、六大臣・御鍬・4頭の獅子が踊る。太鼓は、二人一組になって踊り



写真 豪快で優雅な獅子踊り



写真 町太鼓の合図で祭りが始まる



写真 御行司を中央に御神事踊り

ながら太鼓を叩く。踊りの中央には、「中踊り」と呼ぶ女装した幼児が立ち、「児踊り」と呼ぶ幼児6人が小さな太鼓を持って立つ。

獅子頭は、奉書紙を短冊状に切ったものを貼り合わせ獅子の髪とした重さ約 20kg ほどで、毎回貼り替えられ、獅子頭が振られると白い髪がゆれ勇壮である。

社前での踊りが終わると、若宮社・北町・御旅所と町内各所での踊りに向かう。踊りの一行が神社を出ると、武者・神輿が町内巡行に担ぎ出される。



写真 若宮社での踊り



写真 御旅所での踊り



写真 北町での踊り

町内各所で踊った踊り一行と神輿が神社前に 集まり、「獅子の化粧落とし」と呼ぶ貼り合わせ た髪を落とし、祭りのクライマックスともいう べき「橋懸り」の斎場橋に向かう。沢山川に架 かった斎場橋から、4頭の獅子が橋から逆さに 吊るされ、獅子頭で川面を叩くと大きな水しぶ きとともに、両岸から見守る住民や見物客から 大きな拍手と歓声がおこる。橋懸りの後、橋を 渡り対岸の唐崎社前で御神事踊りが行われ、神 社に戻り祭りは終了する。



写真 踊りが終わると神輿巡行



写真 灯籠が立てられた表通り



写真 衣装を整え神社へ



写真 唐崎社での神事

橋懸りの斎場橋は、昭和52年(1977)に水害対策のために、沢山川の堤防がかさ上げにより架け替えられ、以前は水面まで2mほどであったが、現在は4mと深くなり、

逆さに吊るされる獅子頭役、落とさないように 吊るす役の人も大変な祭りとなっている。

祭りの由来は、怨霊たたりを鎮めるために始まったと伝えられている。祭り中に鍬で耕す所作をする場面や、田植え唄が歌われたりするところから、怨霊たたりを鎮めるとともに、田畑の豊穣を祈願する祭りでもある。六大臣の古風な所作や、豪快で優雅な獅子舞、古雅な太鼓踊りなど、さまざまな芸能が一緒になり、整然として一団となって行われるのは、全国でも珍しい祭りといわれている*。

*三隅治雄「ゆらい」『雨宮の御神事』御神事保存会 1973年



写真 祭りのクライマックス「橋懸り」 4頭の獅子が逆さに吊るされ、水面を叩く *獅子の髪(奉書紙)が、千曲川を流れ下り 新潟県に着く頃、田植えが始まるという。

まとめ

明治5年(1872)以前は、屋代田んぼを取り囲む村が合同で御神事踊りを行い、松代の藩主のところまで踊りを披露しに出かけていた。明治維新後の町村合併により合同での祭りは行われなくなり、次第に周辺地区でも行われなくなった中で、雨宮坐日吉神社の所在する雨宮地区のみ現在も祭りを行っている。

こうした伝統芸能が四百年も引き継がれていることは、雨宮地区住民の伝統を誇りと

して、地域の結束を図る意気込みが感じられ、鎮守の雨宮坐日吉神社とともに歴史的 風致を形成している。重要無形民俗文化財の指定を受けた歴史ある祭りでもあること から、今後も受け継ぎ、後世に伝えていきたい歴史的風致である。

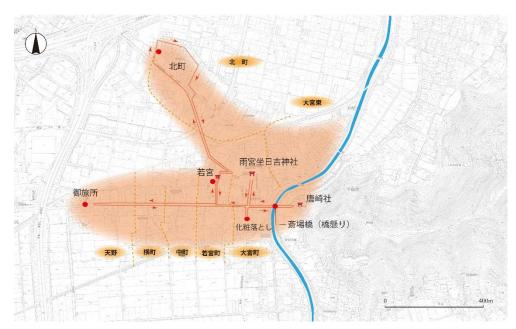


図 2-33 雨宮の御神事踊り経路及び歴史的風致範囲

コラム 自然堤防上の集落

屋代地区から雨宮地区一帯は、千曲川右岸に形成された自然堤防が長さ約2km、南北幅約200mにわたって続き、その南側には後背湿地の屋代田んぼが広がっている。

この自然堤防上の雨宮集落北側に、国道 403 号線のバイパスが計画され平成 $7 \sim 9$ 年 (1995-97) に、大規模な発掘調査が行われた。その結果、地表下 60 cmから 100 cmほどのところから弥生時代から中世に至る集落跡が折り重なって発見された。この自然堤防

上では、昭和32年(1957)からこうした遺跡の発掘調査が度々行われ、弥生時代の集落跡や森将軍塚古墳を築造した人びとのムラの跡、奈良・平安時代の寺跡・集落跡、戦国時代の居館跡などが見つかっている。

千曲川とともに暮らす人びとは、数百年に一度 という洪水により集落が埋まった後、しばらくし てまたここに集落を営み、今日までこの自然堤防 上で暮らしている。



写真 自然堤防上の集落

7 あんずの里にみる歴史的風致

千曲川右岸の山裾にある森・倉科地区は、東部山地から流れ出た沢山川・三滝川の扇状地に、三方を山に囲まれ西側に開けた傾斜地上に営まれた集落である。土壌が礫質土のため水田に適さず、大きな石や礫の多い畑地となっている。こうした畑地では、江戸時代から代々あんず栽培が行われてきた。春には、集落はピンクの花で埋め尽くされる。

あんずの里

森・倉科地区の農家の屋敷や畑の隅には、必ずといっていいほど在来種のあんずの木が数本植えられている。かって、あんずの種やあんず干しを出荷するためや、各家庭で自家用のあんず干しを作るために植えられていたものである。主屋や納屋・蔵などの建物の脇に、今では直径 50 cm以上、高さ 10 mほどと大きな在来種のあんずの木が数本みられる。



写真 高い大きな木は在来種のあんず

在来種のあんずは、主に種を収穫し、果肉はあんず干しにする直径3cmほどの小粒の実がなる品種で、またその花は、品種改良種のあんずの花よりも花の色が濃いピンク色で、大きな古木とともに花が見事である。

市では「市の花」に定め、花がきれいな在来種のあんずの木を保存樹木として指定(千曲市生活環境保全条例)し、集落景観の一部として大切に保護を図っている。



図 2-34 あんずの里 森・倉科地区



写真 屋敷に植えられたあんず 3本のあんずの木は保存樹木



写真 屋敷に植えられたあんず



写真 屋敷に植えられたあんず

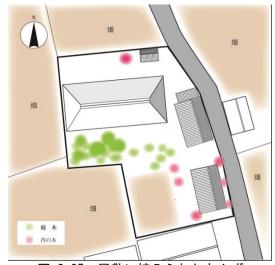


図 2-35 屋敷に植えられたあんず

森・倉科地区には、江戸時代後期から昭和 40 年代に建てられた歴史を刻む民家が 260 棟ほどある。こうした民家は、木造 2 階建の主屋と土蔵や納屋などで構成されており、また建物の周囲には在来種のあんずの大木があり、あんず栽培の歴史を感じさせる。あんずの花と歴史的な民家群は、この地域の特徴的な農村景観を作りだしている。住宅を新築しても、あんずの木は切らずに大切に残されている。歴史的建造物の農家とその屋敷に植えられている在来種のあんずの木は、あんず栽培の歴史を現在に伝えるとともに、その風情はあんずの里の原風景ともいえ、また花見や絵画の対象ともなっている。

あんずの栽培

あんず栽培の起源は定かではないが、『延喜式』に信濃国から「杏人」(杏仁)が納められていることから、古くから特産品であったことが知られる。江戸時代の安永年間(1772-1780)に、松代藩では殖産興業策として、各村にあんずの苗木を配布し栽培を奨励した。

森・倉科地区の扇状地の礫質土が栽培に適 していたために、現在見るようなあんず畑と なったものと推定される。



写真 実は7月初旬に収穫される

あんずの種「杏仁」は、咳止めの漢方薬として用いられており、文化8年(1811)にはあんず干(実の果肉を干して乾燥したもの)の販売が記録に残る。明治35年(1902)に、森村にあんずの缶詰加工場が操業し、東京方面へ出荷されるようになり、明治42年(1909)にはジャム製造も始まった。その後、昭和30年代(1955-1964)以降あんず干しの生産は減少し、自家用が主となった。また杏仁も昭和53年(1978)以降、長野県での生産はなくなった。

現在、生産されているあんずは、加工用または生食用に品種改良したものである。大正4年(1915)頃、森村で作り出された新品種に「平和」があり、ほかにも「昭和」や「鏡台丸」がある。現在は、長野県果樹試験場で作られた「信州大実」やカナダ原産の「ハーコット」が導入され、主に生食用として栽培されている。あんずの生産量は、平成24年(2012)青森県の1,300 t に次いで長野県1,000 t で、そのうち千曲市産は4割ほどである。

江戸時代ではあんずの種を出荷してきたが、近代にはあんずの実を加工用に出荷し、 現在では生食用として出荷されるものが多く栽培されている。最近では、市商工会議 所を中心に「杏都」ブランドを設けて、あんずを使ったスイーツなどの加工品の開発、 販売に力が入れられている。

あんずまつり

森地区のあんずまつりは、昭和30年(1955)の森村・雨宮縣村・屋代町との合併記念事業として昭和31年(1956)4月14・15日に開催されたことに始まり、60回を数える。昭和38年(1963)に約5千人だった花見客は、現在約20万人に増えている。

古くからあんずの栽培とともに、あんずの花見が行われてきた歴史があることから、

あんずの花を多くの人に楽しんでもらうために、 平成13年(2001)に、25品種、200本のあんずを 植え、花見客の休憩・案内施設として民家を改装 した「あんずの里スケッチパーク」を整備し、た くさんの花見客に見ていただくように努めている。

まつり期間中は、最寄の屋代駅からシャトルバスの運行や、スケッチパーク内のあんずの花の夜間ライトアップやコンサートなどの催しが行われている。

まとめ

森・倉科地区のあんずの栽培は、生産性の低い 礫質土に適した作物として栽培されてきた江戸時 代に遡る歴史がある。

あんずは作物であるが、春に桜の花より一足早く咲く淡いピンク色の花により、集落全体がピンク色に染まったように咲くあんずの花は、当市の春を代表するものである。



写真 スケッチパークを散策する花見客



写真 ピンク色に染まるあんずの集落

森・倉科地区にある古い農家の建物と、在来種のあんずの大木は、あんず栽培の歴史を物語るものであるとともに、花見や絵画の題材ともなっており、当市の特色ある農村景観として残していきたいものである。森・倉科地区のあんず栽培の歴史は、あんずの花と実を活かした歴史的風致といえるものである。

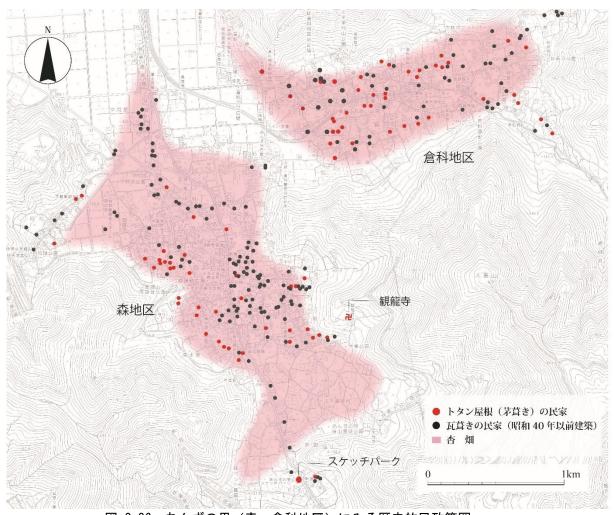


図 2-36 あんずの里(森・倉科地区)にみる歴史的風致範囲

コラム 観龍寺と信濃三十三番観音霊場信仰

森地区の大峰山の麓にある真言宗の観龍寺は、創建年は不明で江戸時代に再建されたと伝えられている。長野県宝に指定されている千手観音坐像、十一面観音立像・聖観音立像(平成12年に盗難)はじめ、市指定有形文化財の仏像27点などを所蔵している。

信濃三十三番観音霊場第6番の札所に数えられ、「森のお観音さん」として親しまれ、あんずの花の咲く頃には花見客が多数訪れている。市内の札所にはほかに、5番倉科の妙音寺、13番中原の開眼寺、14番姨捨の長楽寺の4か寺が数えられている。いずれも、檀家のない信徒により維持されているお寺である。



写真 県宝 千手観音坐像

8 森将軍塚古墳にみる歴史的風致

千曲川右岸の尾根上には、古墳時代前期~中期の前方後円墳4基、左岸の尾根上(長野市域)にも同様に、前方後円(方)墳5基が築かれている。長野県の前方後円墳の分布から、古墳時代中期までは千曲川流域の善光寺平南端(18基)に築かれ、中期以後天竜川流域の飯田市周辺(25基)に築かれるという特徴がある。こうした大型首長墓の変遷から、信濃国の成立やその範囲について、その発祥地が善光寺平と推察されている。

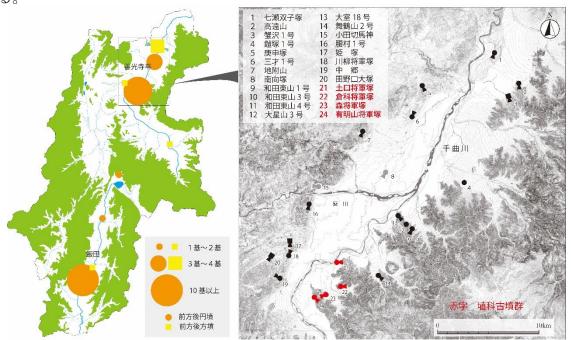


図 2-37 長野県の主要な古墳と埴科古墳群

森将軍塚古墳の周辺

市内には、昭和46年(1971)に史跡指定された森将軍塚古墳(屋代地区)のほかに、 有明山将軍塚古墳(屋代地区)・倉科将軍塚古墳(倉科・生萱地区)・土口将軍塚古墳 (土口地区・長野市)の3基の前方後円墳があり、平成18年(2006)に、森将軍塚古墳 境を含めた4基の前方後円墳が「埴科古墳群」として史跡指定された。

森将軍塚古墳 有明山から北に延びる標高 490 mの尾根上に築かれた古墳時代前期の全長 100 mの前方後円墳である。長さ 7.6mの長大な竪穴式石室を埋葬施設とし、現時点で県下唯一の きんかくぶちしんじゅうきょう 三角縁神 獣 鏡 を副葬し、墳丘上に埴輪列を設けた古墳である。大型首長墓の前方後円墳では、長野県下最大規模の前方後円墳である。

平成4年(1992) に、築造当時の姿に復原整備され広く公開されている。

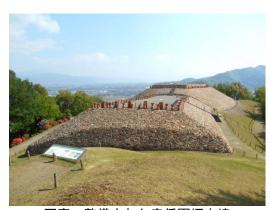


写真 整備された森将軍塚古墳

有明山将軍塚古墳 有明山から北に延びる標高 540mの尾根上に築かれた古墳時代前期の全長 37mの前方後円墳である。長さ 6.0mの竪穴式石室を埋葬施設とし、素文鏡や小札革綴 胄を副葬し、埴輪列を設けない古墳である。

倉科将軍塚古墳 東部山地の天城山から西側に延びる標高 550mの尾根先端に築かれた古墳時代中期の全長 82mの前方後円墳である。全長 93mの川柳将軍塚古墳(長野市)に次ぐ、県下3番目の墳丘規模の前方後円墳である。後円部頂に長さ 6.3mの竪穴式石室、前方部頂に長さ 5.5mの竪穴式石室を設けている。盗掘のため、主要な副葬品は見つからなかったが、短甲や鉄鏃など鉄製武器の副葬があり、墳丘上に埴輪列を設けた古墳である。

対岸の古墳群 千曲川を挟み左岸側の長野市域には、姫塚古墳(32m前方後方墳)、川柳将軍塚古墳(93m前方後円墳)、中郷古墳(53m前方後円墳)、田野口大塚古墳(40m前方後方墳)、腰村1号古墳(43m前方後円墳)がある。いずれも、古墳時代前期~中期と推定されているが、確認調査がされていないため実態は不明である。



写真 有明山将軍塚古墳



写真 倉科将軍塚古墳



写真 土口将軍塚古墳

森将軍塚古墳の保存運動

善光寺平には、「将軍塚」と名付けられた古墳が森将軍塚古墳をはじめ16基あり、地元では偉い人のお墓ということで呼んでいた。また、森街道(現在の県道白石千曲線)が開かれる以前は、森地区から屋代地区への通り道として森将軍塚古墳の前方部裾を通る道が利用され、古墳は行き交う人びとの休憩場所としても親しまれていた。



写真 昭和4年(1929)森本六爾撮影 「筑波大学所蔵

森将軍塚古墳のことが書物に取り上げられたのは明治 15 年 (1882) の『長野縣町村誌』においてである。また『埴科郡志』(1910)、『長野県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』(1923) などがある。昭和 4 年 (1929) には、考古学者森本六爾により森将軍塚古墳の踏査、写真撮影が行われた。その写真を見ると、古墳や尾根上には大きな木はなく畑となっていることや山道がみられ、人びとと古墳の関係をみることができる。

昭和31年(1956)には、『信濃史料』第1巻が刊行され「森将軍塚」と名付けられて紹介された。昭和40年(1965)に、森将軍塚古墳は長野県史跡に指定され、指定に伴う確認調査が3か年にわたり行われ、古墳時代前期の竪穴式石室を持つ重要な古墳であることが明らかにされた。

県史跡指定後の昭和45年(1970)には、開発に伴う 土砂採取により古墳の保存が危ぶまれる事態となった。 そのために市民・行政・研究者などから成る保存運動が おこり、旧更埴市内の全世帯の91.1%(17,275名)の 保存を求める署名が集められた。昭和46年3月16日 付けで、古墳は国の史跡指定を受けて保存されること になった。

旧更埴市では、広範な市民によって保存された古墳の 活用にあたり、古墳本来の姿を市民だれもが理解でき るものとするために、「全面発掘調査に基づき、古墳築 造当時の姿に正しく復原整備を行う」ことを基本方針 とした整備事業を実施し、昭和56年(1981)~平成4 年(1992)まで11か年要し、平成4年9月に一般公開 された。

また、周辺一帯を「科野の里歴史公園」として整備を 行った。平成6年(1994)に、公園に隣接して長野県 立歴史館が設置され、平成9年(1997)には森将軍塚 古墳の出土品を展示した森将軍塚古墳館が開館した。 現在、整備された森将軍塚古墳の写真が小中学校の教 科書に掲載されていることから、森将軍塚古墳館には 年間約300校、25,000人の子どもたちが見学に訪れて いる。

一方、平成2年(1990)に保存を願った市民有志によ り「森将軍塚古墳友の会」が設置され、保存し整備さ れた古墳を市民の手で後世に伝えようと古墳の草取り が行われている。古墳は築造当時の姿に、当時と同じ 工法や材料で復原されたため、墳丘表面の葺石の間か ら草が生えるので古墳周囲の草取りを年3回行ってい る。平成10年(1998)からは、古墳上で見学者に説明 を行うボランティアガイドも4月~11月まで毎日行っ ている。



森将軍塚古墳



写真 市民による古墳の保護活動



古墳上での科野大王の 収穫感謝の儀式

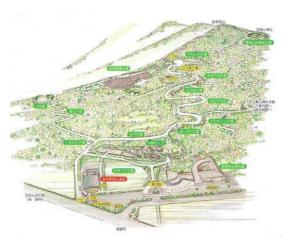
また、平成4年(1992)11月3日、復原整備された 古墳を市民みんなで見に行こうと、市民の有志による手づくりイベント「森将軍塚ま つり」が開催された。以後、毎年11月3日に市内各種団体(53団体)から構成する実 行委員会を設け、市民手づくりイベントとして定着して24回目となり、毎回1万人ほ どの人出がある。

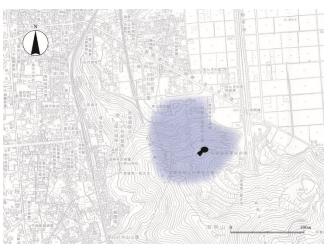
一方、有明山将軍塚古墳・倉科将軍塚古墳・土口将軍塚古墳では、それぞれの所在地 区の自治会により、年2回の見学路の整備が行われている。また、平成11~13年(1999-2001) には、3基の前方後円墳の保存を目的とした範囲確認調査を行い、現状で保存 されている。

まとめ

長野県最大の古墳である森将軍塚古墳の保存は、昭和4年(1929)の調査から市民の保存運動を経て、復原整備されるまでにはおよそ60年要した。特に、昭和45年(1970)の森将軍塚古墳の保存運動では、市民の9割もの保存署名が集められた力は大きなものであった。そうした力が、現在のボランティア活動や、毎回1万人の参加者がある市民手づくりイベント「森将軍塚まつり」に受け継がれている。

地域に残る文化財の古墳を後世に伝えるために、市民自ら保護活動や積極的に活用を行っている姿は、古墳とともに歴史的風致を形成しているといえる。





* 科野の里歴史公園及び長野県立歴史館敷地一帯

図 2-38 森将軍塚古墳にみる歴史的風致範囲

コラム 塚掘り六兵衛

明治36・37年(1903・04)ごろ、塚掘り六兵衛が森将軍塚古墳へ盗掘に行ったところ、既に何者かによってほとんどの副葬品は持ち去られ、わずかな物しか見つけられなかったという話が伝わっている。通称「塚掘り六兵衛」は実在の人で、名前は北村六左衛門といい土口の農家に婿養子に入ったが家業を継がず、あっちこっちの塚を掘り、その副葬品を売って酒を飲んで暮らしていたという塚どろぼう、盗掘者である。

森将軍塚古墳では、その六兵衛より先に盗掘した者がいたようである。また、森将軍塚古墳の中は真っ赤に塗られ、頭に金の冠がのっていたという話も伝わっている。森将軍塚古墳の竪穴式石室の壁面は、ベンガラで赤く塗られ、床には水銀朱がまかれていたことが、発掘調査で確認されているので、金の冠も本当にあった可能性もある。

当市周辺では、あの古墳も、この古墳も塚掘り六兵衛によって盗掘されたという話が伝わっており、六兵衛の仕業になっているが、何人も盗掘者がいたと思われる。

9 千曲川流域にみる歴史的風致

千曲市の市名の由来となっている千曲川と人びとの関わりは、とても深いものがある。

千曲川の豊かな水は、流域の人びとに多くの恵みをもたらす一方で、たびたび氾濫し大きな被害をもたらしてきた。地域住民にとって治水は大きな関心事で、堤防を築き被害を防ごうとした人びとと水との闘いの歴史や、水天宮を祀り水難除けを祈願するなど水に対する人びとの想いがみられる。現在までその思いは継承され、千曲川の豊かな恵みを享受しながら川とともに暮らす人びとの関わりがみられる。

千曲川の堤防と祈り

千曲川はたびたび氾濫してきたが歴史的に大きなものには、平安時代の仁和4年(888)の「仁和の洪水」のほか、江戸時代の寛保2年(1742)の「戌の満水」がある。特に「戌の満水」では千人を超える死者があった。また、江戸時代には堤防や田畑の復興をたびたび行ったことや、川筋が変わって村境争論がしばしば起こったことなどが記録に残っている。

本格的に千曲川の堤防が整備され たのは、大正7年(1918)に着工さ れ昭和16年(1941)に完成した「内 務省堤防」と呼ばれているものであ

る。この堤防ができるまでは、戸倉上山田温泉街を 守るために明治末期に自営堤防を築くとともに、堤 防上に千曲川に向けて水天宮を祀り水除け祈願を行 った。大正9年(1920)に左岸の内務省堤防が完成 し、水天宮の石碑も再び堤防上に祀られた。

大正13年(1924)から始まった温泉夏祭は、この 場とすいてんぐう 堤防上の本水天宮を温泉街に分祀して行っているも のである。現在も祭り当日は、まずこの堤防上の本 水天宮に洪水祈願を行った後に、温泉街に分祀した

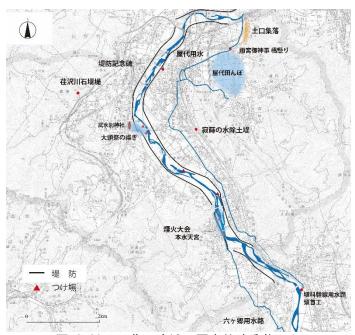


図 2-39 千曲川流域の歴史的建造物ほか



写真 堤防上の本水天宮 右側に千曲川、左側に温泉街

水天宮において温泉街の安全祈願の神事が行われ、温泉夏祭が賑やかに温泉街において行われている。

ほかにも、洪水から家屋や田畑を守るために人びとが工夫した痕跡を、川沿いの集落や支流に見ることができる。

元禄6年(1693) 寂蒔・鋳物師屋・打沢・小島村の四か村によって築かれた「寂蒔

の水除土堤」は、洪水時には北国街道(主要道)を土のうや石で埋めて堤防としたものである。

明治15~17年(1882-84)に築かれた「荏沢川の石堰堤」は、千曲川支流に設けられた砂防施設で、内務省直轄砂防事業として行われた我が国初期の砂防施設の一つである。

土口地区の市道(松代道)沿いの集落では、1~3mほどの石垣を積みその上に家屋を建て、洪水から家屋を守る工夫をした高石垣が残る。



写真 寂蒔の水除土堤



写真 荏沢川の石堰堤



写真 土口の高石垣

千曲川の伝統行事

千曲川左岸にある延喜式内社の武水別神社には、新嘗祭として文禄2年(1593)から行われている伝統行事の大頭祭がある。武水別神社が現在地にいつ建てられたのかについては不明であるが、境内に在る最古の建造物は室町時代末期に建てられた摂社高良社本殿である。寛政3年(1791))の「八幡宮境内惣絵図」には東西146間のうち116間が「川欠」と記され、千曲川の洪水によっ



写真 千曲川での禊ぎ

て流失した記録が残る。現在の本殿や拝殿は、嘉永3年(1850)に諏訪の宮大工立川 カレスララとみまさ 和四郎富昌によって建てられたものである。

この拝殿前で、大頭祭の時に頭人(氏子から選ばれた役)が、神社に奉納する新米は「御供」と呼ばれる一口大にちぎった餅である。この餅は、毎年12月3日に、5人の頭人や武水別神社の総代らによって餅つきが行われ準備される。この時に、餅つき役の若者らは杵を担ぎ神社から約1kmの千曲川まで走り、千曲川の水で禊ぎをしてから餅つきを行うことが古くからの伝統である。現在も、12月の冷たい千曲川に褌姿で入り、杵で餅つきの仕草をして気勢を上げ、神社まで走って帰り餅つきを行っている。

また、千曲川右岸にある雨宮 坐 日吉神社の春祭りにおいて、重要無形民俗文化財

「雨宮の神事芸能」の御神事踊りが行われている。神社は、千曲川の自然堤防上に江戸時代後期の社殿が建てられている。北国街道から分岐した松代道沿いの集落には、かつての街道を偲ばせる民家が点在している。

この祭りの中で、「「たいだり」と呼ぶ神事が行われている。千曲川の支流の沢山川の斎場橋から獅子を逆さに吊るし、獅子の髪 (奉書紙)が剥がれ落ちて、沢山川か



写真 雨宮の御神事「橋懸り」

ら千曲川を流れ下り、新潟県に入り信濃川に流れ着く頃、屋代田んぼでは田植えがは じまるといわれている。祭りは、疫病や洪水などのたたりを鎮め、田畑の豊穣を祈る 祭りである。

祭事において、千曲川で禊ぎや橋懸りを行うことは、 当地域の人びとの精神的な拠所として、暮らしや水田 耕作などと千曲川が深く関わりを持っていることを物 語るものである。

千曲川での漁業には、アユ釣りや川魚のハヤの「つけ場」がある。アユ釣りは、6月下旬から7月初めに解禁になると、戸倉上山田温泉前や冠着橋付近でたくさんの釣り人が友釣りを楽しんでいる姿が見られる。つけ場は、千曲川中流域独特のハヤの漁法である。獲れたての新鮮な川魚は、戸倉上山田温泉客をはじめ地元住民に、千曲川の味覚として楽しまれている初夏の風物詩である。



写真 温泉前でのアユ釣り



写真 つけ場

まとめ

千曲川は自然堤防を形成し、その上に人びとが生活し集落を営むとともに、幾度となく洪水による大きな被害を人びとに与えてきた。一方、人びとは堤防の整備や水天宮を祀り洪水に備えるとともに、豊かな水を農業用水として利用してきた。また、伝統

行事の祭りや川魚にみられるように、心の拠所や楽しみの場としてきた。

セルリアンブルーの千曲川の流れとともに、堤防での祭事や千曲川での祭事や千曲川での禊ぎなど伝統行事、風物詩のつけ場は、千曲川中流域に暮らす人びと歴史的風致である。当市の市名の由来となる歴史的風致を、大事にしるをといったいものである。

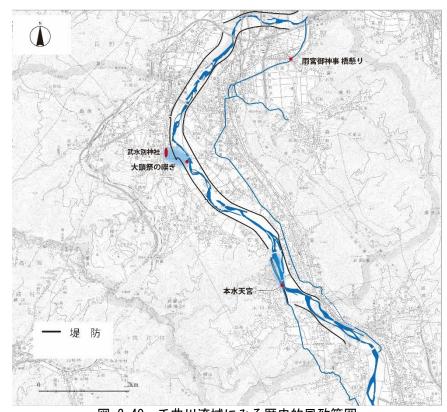


図 2-40 千曲川流域にみる歴史的風致範囲

コラム 屋代田んぼ

千曲川の豊かな水は、古くから農業用水として利用されてきた。屋代地区から雨宮地区一帯は、千曲川右岸に形成された自然堤防が続き、その南側に後背湿地を形成している。現在では、約230haの水田が造られ、通称「屋代田んぼ」と呼ばれ稲作が行われている。

現水田面の地下 60~100 cmほどに、平安時代の条里水田が仁和4年 (888) の大洪水の洪水砂に覆われて埋没していることが、昭和40年 (1965) 代に発掘調査で確



写真 屋代田んぼ (1982 年秋) *高速道路建設以前

認された。こうした埋没条里水田跡の発掘調査での発見は、わが国で最初の事例である。 その下層には、森将軍塚古墳が築かれた頃の古墳時代の水田や、わが国で稲作が行われ 始めた頃の弥生時代の水田跡も確認されている。

屋代田んぼは、千曲川流域に暮らす人びとが積極的に千曲川の水を利用し、水田耕作を行ってきたものであり、二千数百年におよぶ歴史を重ねた水田である。